

令和 7 年度
香川大学医学部国際交流活動報告書

令和 8 年 7 月

香川大学医学部
国際交流委員会

目 次

序文	1
医学部国際交流委員会委員長 門田 球一	
香川大学医学部新国際交流指針	2
協定校・準協定校の紹介と交流の概要	
中国医科大学	8
河北医科大学	10
カルガリー大学医学部	12
ブルネイ・ダルサラーム大学	14
チェンマイ大学医学部	16
チェンマイ大学看護学部	18
ヤンゴン第一医科大学	20
プトラ・マレーシア大学	22
カリフォルニア大学マーセド校	24
カンボジア健康科学大学	26
ニューカッスル大学医学部	28
グラスゴー大学医学部	30
ブータン王立医科大学	32
タマサート大学・チュラボーン国際医学部	34
ロンドン大学セントジョージ医学校	36
令和7年度国際交流イベント	
チェンマイ大学看護学部 International Nursing Seminar 2025 in Kagawa への 受入れ	38
国際交流コーディネーター 山本 美輪、谷本 公重、川田 紀美子	
グラスゴー大学 Medical Elective 2025 への受入れ	40
国際交流コーディネーター 吉田 裕美	
香川大学医学部とブルネイ・ダルサラーム大学医学部との国際交流プログラム ー2025年冬季国際プログラム（第14回）ー	43
国際交流コーディネーター 安田 真之	
JICA 2025年度 課題別研修 「遠隔医療による地域保健医療体制の改善ー日本の遠 隔医療先進県の事例を通じてー」実施報告	45
国際交流コーディネーター 和田 健司	
2025年度 JST さくらサイエンスプログラム「インドにおける臨床工学技士育成と 持続可能な医療体制推進に向けた連携強化プログラム」実施報告	46
国際交流コーディネーター 和田 健司	

チェンマイ大学医学部 Medical Seminar 2024 in Kagawa への受入れ.....	47
国際交流コーディネーター 鈴木 裕美、宇山 徹、門田 球一	
令和7年度国際交流委員会委員名簿及び国際交流コーディネーター一覧	48

序 文

令和7年度（令和7年4月～令和8年3月）に香川大学医学部（医学科、看護学科、臨床心理学科）が展開した活動を取りまとめた国際交流活動報告書が完成しましたので、ここに掲載いたします。今年度も、学生の海外派遣や留学生等の受入れ、ならびに研究者の対面による交流を積極的に推進することができました。以下に、主な活動をご紹介します。

学生の海外派遣事業としては、「医学実習Ⅱ」の期間中には、イギリスのニューカッスル大学およびグラスゴー大学、あるいはタイのチェンマイ大学において、医学科6年生4名が臨床実習を実施し、7月に開催された海外学生留学事業報告会において、留学の成果や体験を報告しました。さらに、令和7年夏期には、「International Summer Medical Seminar」によりブルネイ・ダルサラーム大学医学部へ医学科2～4年生6名が短期留学し、チェンマイ大学看護学部へは看護学科3年生5名を派遣し、現地交流を行いました。また、令和8年春には「医科学研究」の期間中、ブルネイ・ダルサラーム大学において医学科3年生4名が実習を行いました。

留学生の受入れ実績としては、ブルネイ・ダルサラーム大学から生命科学系の学生（合計6名）を3か月間の長期にわたり受け入れ、医学部内の講座に配属して研究を行いました。令和7年12月には、「International Winter Medical Seminar」において、ブルネイ・ダルサラーム大学の医学生3名が研究室やスキルスラボでの実習を行いました。さらに、令和8年3月には、チェンマイ大学医学部から留学生1名を受け入れ、期間中は耳鼻咽喉科学講座に配属し、講義や附属病院での実習を実施しました。加えて、国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）が実施する国際交流事業「さくらサイエンスプログラム」により、全インド医科大学5校（マドゥライ校、デーオーガル校、カルヤニ校、ナグプール校、マンガラギリ校）から6名の医師を受け入れました。

次年度以降に向けても、さらに充実した国際交流活動を計画しており、現在、着実に準備を進めております。これらの活動は、日頃より支えてくださっている多くの皆様のご尽力の賜物であり、心より感謝申し上げます。今後とも、引き続きご支援とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

令和8年7月吉日
香川大学医学部国際交流委員会
委員長 門田 球一

香川大学医学部新国際交流指針

香川大学では、令和4年4月より、第4期中期目標・中期計画が始まり、その中で地域特色を活かした「国際化」が重要な施策のひとつとなっている。

香川大学医学部では、平成21年度に国際交流指針を設け、その後少しずつ調整を加えながら、基本的には以下の理念と方策に基づいて、国際交流活動を展開している。

1) 国際交流の目的（理念）

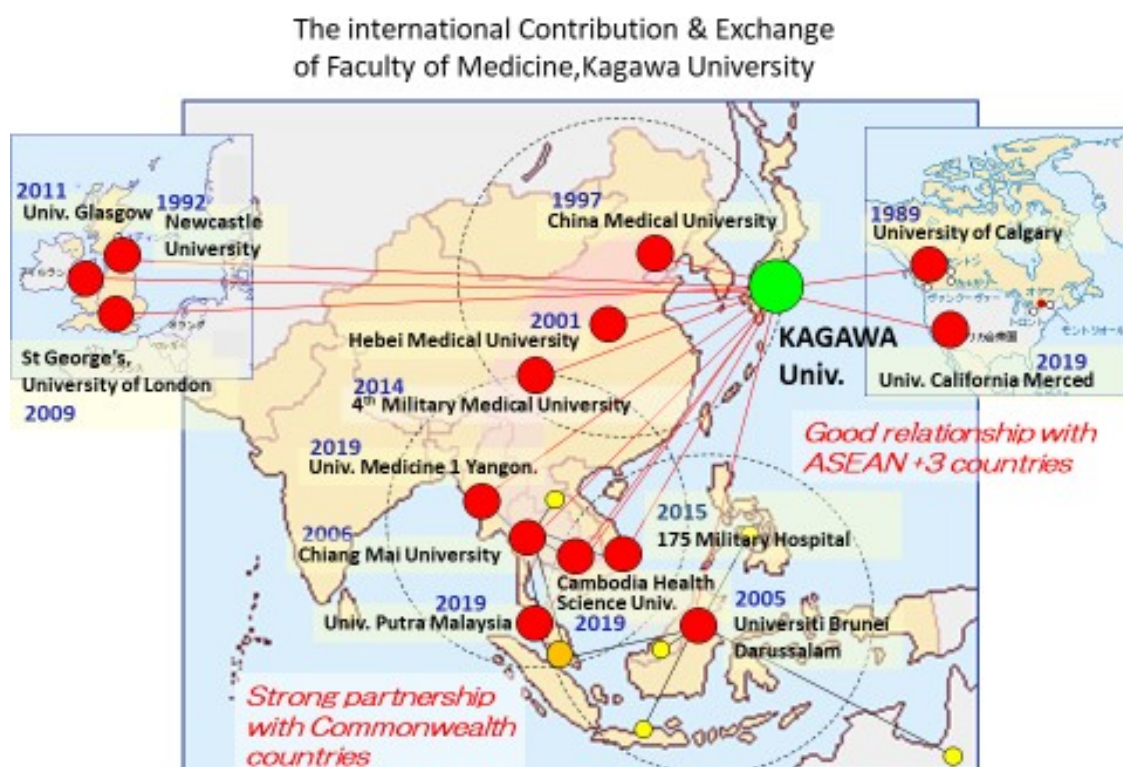
現在の医学部の基本理念は次のとおりである。

1. 世界に通ずる医学、看護学及び臨床心理学の教育研究を目指す。
2. 人間性の豊かな医療人及び心理援助者、並びに医学、看護学及び臨床心理学の研究者を養成する。
3. 医学、看護学及び臨床心理学の進歩並びに人類の福祉に貢献すると共に地域の医療及び心理援助の充実発展に寄与する。

国際交流活動は、上記理念を実現する有効な方法のひとつとして位置付けられている。従って、香川大学医学部の国際交流の目的（理念）を次のように定める。

国際交流をととして、グローバルスタンダードを有した「学生」「医師」「看護師」「心理援助者」「研究者」の育成を行うとともに、人類の福祉や地域への貢献を行う。

この理念を実現するために、行動目標と方策を以下のように策定した。



2) 国際交流の行動目標（6つのC）

1. 焦点を絞った重点的な交流活動を行う＝*Concentration*
2. 交流校との相互の連携を図る＝*Connection*
3. 拠点交流先を核としてコンソーシアムを形成する＝*Consortium*
4. 政府機関等と協同したプロジェクトを展開する＝*Cooperation*
5. コミュニティとのネットワーク作りを強化する＝*Community-based*
6. 地域社会のニーズに合った医学的貢献を行う＝*Contribution*

1. 焦点を絞った重点的な交流活動を行う＝*Concentration*

数多くの交流校と浅く交流するのではなく、焦点を絞って交流活動を集中する。これはこれまでの活動方針を継続するものであり、数より質の姿勢を継続して貫いていく。その一方で教育研究のグローバル化が進む中で、香川大学医学部においても、多様な国際交流・国際貢献活動が展開されるようになった。こうした活動においては、交流校との協定締結あるいはそれに準ずる合意書を締結し、医学部公認の活動として実施することが重要である。国費留学生などの奨学金の獲得、各種研修事業や国際共同研究の助成金などの獲得にも、協定（合意書）の存在が必要になっている。従って、数より質の姿勢は貫きつつも、実質的で継続的な活動が期待できる交流校とは積極的に協定（合意書）締結を目指す。協定（合意書）は、通常5年で更新されるが、その際に実績や次の5年間の展開可能性を評価し、継続・廃止を決定する。各交流校を複数の国際交流委員等が担当するコーディネーター制を十分に活かし、交流校と密な連携を取り、さまざまな活動を行っていく。

2. 点でなく線で結べる交流に持って行く＝*Connection*

個々の大学との交流を集中的に進めることに加えて、複数の交流先の大学を戦略的に連携していくことが大切である。香川大学医学部は、以下の2ラインを意識して協定校を展開しており、今後もこの方針を維持する。香川大学全学としては、ASEAN 諸国＋中国・韓国・台湾の大学や研究機関との交流を重点的に展開することを方針として決めている。その方針は医学部の戦略とも合致するので、これを意識しながら進める。

○ASEAN 諸国および東アジア諸国との関係のラインを強化する→ASEAN 諸国および東アジア諸国との交流においてイニシアティブが取れる存在になる。

○英国圏の諸国との関係のラインを強化する→Common Wealth Countries との関係で香川大学医学部の存在を示す。

これら2つのラインを統合することで、南アジアやオセアニア、さらにアフリカ諸国との関係強化を図る。

3. 拠点交流先を核としたコンソーシアムを形成する＝*Consortium*

国内・海外において複数の大学とコンソーシアムを作ることが重要である。

例えば、チェンマイ大学との交流では、香川大学の拠点大学と定め複数の学部が参加している。そして、同大学を核としてタイ国内の他大学との連携や、周辺諸国（CLMV 諸国）のミャンマー、ベトナム、カンボジアなどの主要大学との連携を推進していく。

またブルネイ・ダルサラーム大学を核としてフィリピン、インドネシア、マレーシア、シンガポールなどの主要大学との連携を図ることを目指している。このようなコンソーシアム

の構築により、主たる活動を核となる大学と行うことで、香川大学医学部の交流方針に基づき、コンソーシアムに参加する大学へと連携を波及することが可能である。Human resources の確保や、variety に富む選択肢を作ることが可能である。

4. 政府機関等と協同したプロジェクトを展開する = *Cooperation*

国際交流活動を個人あるいは一組織レベルで細々とやるのではなく、医学部国際交流委員会が医学部の交流戦略を掲げて、日本国外務省、各国大使館、JICA, JST, JSPS などと密接な連携を取り実施する。そして競争的資金獲得のための下地を作り、各種の競争的プロジェクトを獲得することが必要である。

ブルネイ・ダルサラーム国大使館、タイ国大使館、チェンマイ総領事館、カンボジア大使館など各国の大使館・領事館や、JICA, JST, JSPS などとの連携を深めつつある。また文部科学省、外務省、厚生労働省、総務省などとも積極的に協同していく。

5. コミュニティとのネットワーク作りを強化する = *Community-based*

○香川県、三木町、各種交流団体、NGO/NPO 団体、学生組織との連携

地域のコミュニティとのネットワーク作りは非常に大切である。医学部はカルガリー大学医学部との交流を介して三木町と非常に密な連携を取り、現在三木町が姉妹町付き合いをしているディズベリー町を紹介し、三木町の中学生のホームステイ訪問が継続している。

こうした地域自治体との連携により、地域貢献として大学の国際交流が果たす役割が明確になる。香川県国際課（香川県の姉妹都市の大学との交流）、県下の交流団体、NGO/NPO 団体との連携も重要である。例えば留学生の語学研修やホームステイなどにおいては香川県の香川国際交流会館（通称アイパル）の支援をいただいている。また、JICA 草の根支援事業においては、実施にあたり県内の NPO 法人との連携で実施している。

6. 香川や交流先の地域社会のニーズに合った医学的貢献を行う = *Contribution*

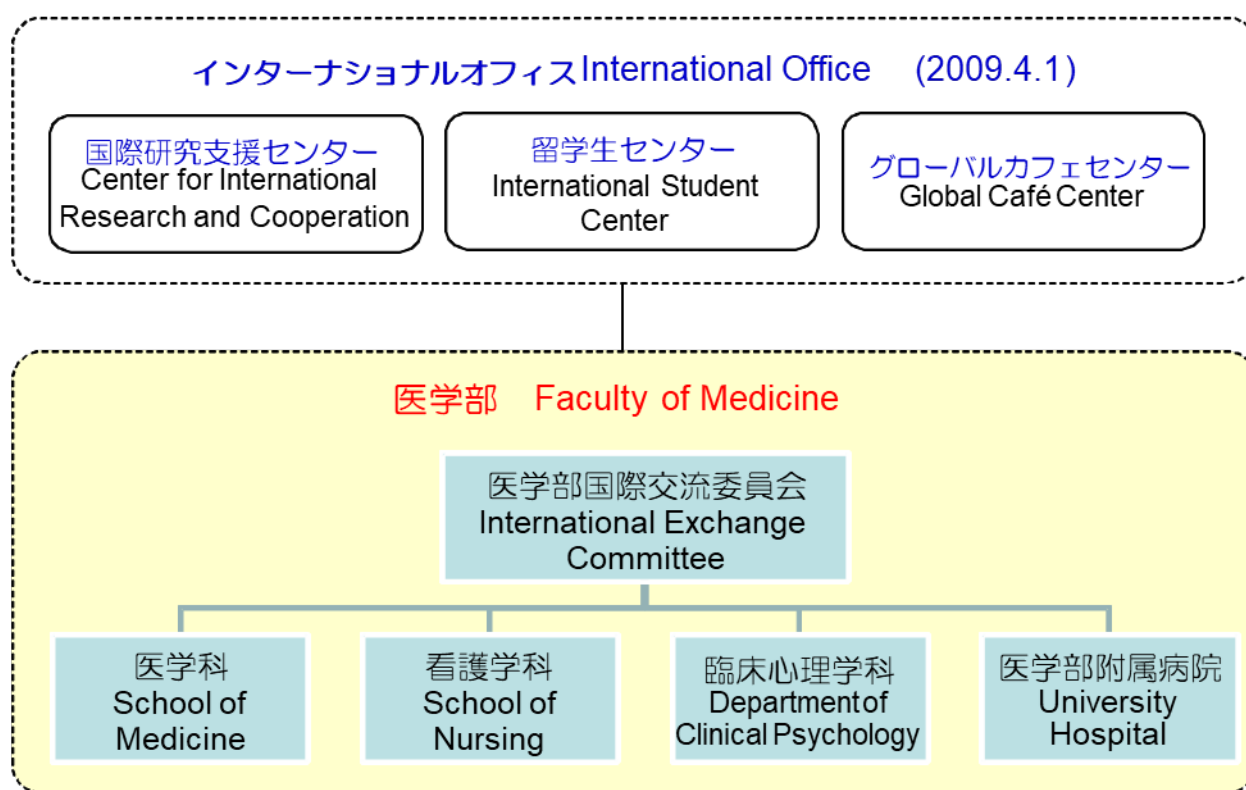
医学部および医学部附属病院の持つ知識やノウハウを、教育、研究、医療などの面で提供し、交流先や地域社会に貢献を果たす。そのためには地元のニーズ、あるいは交流先のニーズを十分に把握し、それに対して有効に貢献することが重要である。そのため、連携大学やその国の考え方や方針と十分に調整した上で、必要とされる貢献をオーガナイズする。

3) 国際交流の方策

1. 医学部国際交流委員会が医学部および附属病院の窓口となる
2. 学生のニーズと教育に対応する交流プログラムを設ける
3. 国際共同研究や国際貢献活動を活性化する
4. 情報発信の充実を図る
5. 留学生、派遣学生の組織化・ネットワーク化を図る
6. 新しい海外研修システムを作る・活用する
7. インターナショナルオフィスや他部局との連携を図る
8. 国際交流活動の安全を図る

1. 医学部国際交流委員会が医学部および附属病院の窓口となる

医学部国際交流委員会が、医学科、看護学科、臨床心理学科、附属病院の交流の窓口となって活動していく。(下図)



2. 学生のニーズや、教育レベルに対応できるプログラムを増やす

医学科、看護学科、臨床心理学科の学生（学部学生、大学院生）の人材育成事業は、これからの国際交流の根幹を成すものである。学生のニーズの多様性や、教育（実習）レベルの妥当性などに対応できるプログラムを増やしていく。このため適切な交流校を増やしていくことも必要となる。

3. 国際共同研究活動や国際貢献活動を活性化する

医学科、看護学科、臨床心理学科の教員の教育研究活動の海外展開を積極的に行い、これを医学部としてサポートする。我々の有する知識や技術を積極的に海外に向けて発信して、国際共同研究や国際貢献活動を実施する。この場合には、2015年に国際連合が提唱し、貧困に終止符を打ち、地球を保護し、すべての人が平和と豊かさを享受できるようにすることを目指す普遍的な行動目標である2030年アジェンダ（「持続可能な開発目標（SDGs：Sustainable Development Goals）」に従って、企画立案し展開するように努力する。医学部としてもこうした活動を支援する。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

17 GOALS TO TRANSFORM OUR WORLD



4. 情報発信の充実を図る

充実した情報発信は特に国際交流においては重要である。ホームページの充実とアップデートを図る必要がある。医学部においては、留学を希望する人、共同研究を希望する人に判りやすく魅力的な構成になるように、医学部 HP と連携して英語ウェブサイトを構築し、随時改訂している。また、多様なビデオコンテンツを整備し提供している。

5. 留学生、派遣学生の組織化・ネットワーク化を図る

タイおよび中国においては、チェンマイ大学など香川大学で勉強した人たちの同窓会が組織化されている。そうした取り組みを医学部でも広げるとともに活用していく必要がある。またチェンマイ大学とブルネイ・ダルサラーム大学には香川大学オフィスを設置した。今後も、留学生（現役、過去の人も含め）の組織作り、香川大学から協定校などへ派遣された経験者の組織作りと、ネットワーク化が必要である。学生や留学生の力は計り知れないほど大きいものであり、それをうまくシステム化することで「学生中心の交流」を実現する。彼らの力とアイデアをくみ上げることのできる体制を作る。

行動目標として掲げた、5. コミュニティとのネットワーク作りや、6. 香川や交流先の地域社会のニーズへの医学的貢献などの実現のためにも、学生にも積極的に参加してもらう。

6. 新しい海外研修システムを作る・活用する

学生の国際交流事業への参加希望者は多い。こうした熱意をさらにステップアップして、USMLE や MRCGP を将来取得し、アメリカやイギリスで臨床研修をするような学生たちのネットワークを作っていく。こうしたネットワークに、学部生のみならず、研修生、大学院

生、卒業生、医局員なども参加してもらえるように持って行く。国際交流活動を英語の勉強のモチベーションとして活用するように持って行くことも重要である。

7. インターナショナルオフィスや他部局との連携を図る

全学の国際交流を遂行するインターナショナルオフィスが設置されており、医学部もこれをうまく活用して連携・協働して国際交流を推進する必要がある。国際交流活動も他分野そして異分野の融合した **Multidisciplinary** な展開が必要であり、他部局との連携が重要になってきている。

例えばチェンマイ大学では、農学部、創造工学部、医学部に加えて社会科学系の学部も交流に参加し大きな広がりを見せている。またブルネイ・ダルサラーム大学との交流でも、農学部や教育学部との共同体制ができている。

8. 国際交流活動の安全を図る

国際交流活動が進み、医学部の教職員や学生の海外渡航が増えてきている。海外で安全に活動ができるように、前もって危機管理については十分な知識を持ち、万一トラブルが発生した際取るべき行動を理解して、渡航する必要がある。このため、学生の渡航に関しては、「香川大学学生等の国外における危機に対する対策要項」が制定されており、インターナショナルオフィスのホームページ上でも「海外での危機（安全）管理」についての情報提供を行っている (https://www.kagawa-u.ac.jp/kuio/study_abroad/23951/)。香川大学が開催している危機管理セミナーの受講を義務付けている。また、外務省の最新の安全情報を日本語で受信できる海外安全情報配信サービスである「たびレジ」への登録も必要である。私的な渡航であっても、渡航届を出すことを義務付けている。さらに、3か月以上滞在する場合には、現地の大使館または総領事館に在留届の提出が必要である。個々人も情報収集を的確に行い、テロのリスクや感染症への感染リスクなどを十分に把握したうえで渡航し、安全に海外での国際交流活動ができるようにする必要がある。



中国医科大学

China Medical University



●学部学生 14,145人 ●大学院生 5,910人 ●教職員 2,249人 ●留学生 730人

ホームページ <http://www.cmu.edu.cn/>

交流協定締結年月日：1997年8月28日 主管学部：医学部



<http://www.cmu.edu.cn/>より抜粋

国際交流の特色

中国医科大学は中国東北地方の中心都市である瀋陽に位置し、非常に古い歴史をもつ大学であり、また日本とも深い関係をもっている。現代医学教育・研究に中心的な役割を果たしている大学で、毎年数多くの人材を養成し、中国の衛生管理ならびに医学・医療のリーダーを輩出している。中国医科大学は約15,000名の学生を有し、また大学院には博士課程約60、修士課程約70余の専門コースが設けられている。国際交流では、アメリカ、カナダ、フランスをはじめ世界の多くの国々と交流協定を締結しており、香港、マカオ、台湾等の外国から439名の留学生を受け入れている。本邦では慶応義塾大学、大阪大学、九州大学等の医学部と姉妹校になっている。

交流実績（令和7年度）

受入・派遣	R7
学生の受入	0
学生の派遣	0
研究者・職員の受入	0
研究者・職員の派遣	0
オンライン交流参加者（本学）	0
オンライン交流参加者（相手機関）	0



教員からの声

中国医科大学は基礎医学院、公衆衛生学院をはじめ計28の研究学院からなる総合的医学教育機関である。学術交流協定は1997年に締結されている。協定締結後も毎年多くの学生が、基礎・臨床医学講座に留学してきたが、最近国費留学生の採択数が激減したため留学生が減少した。

中国医科大学は、設立時より日本との関係が深いため、日本語を話せる職員が数多くみられるのが特徴である。また、日本語コースでは医学部の授業が日本語で行われているため、研究者のみならず学生も日本語を流暢に話せる人も少なくない。新型コロナウイルスの世界的拡大もあり交流は中断している。しかし中国医科大学は国際交流が盛んであり、日本に対しての興味も深いので、今後双方の研究者・学生交流が推進されることを期待している。

医学部教授 三宅 実

私は2000年から2006年まで、国費留学生そしてポスドクとして香川大学医学部第一生理に留学しました。nNOSリン酸化及び希少糖などの研究を集中して、私の研究にとって一番大切な6年間でした。その間とても忙しいですが、今振り返ってみると研究の知識や技術などを習得できて価値があった。

帰国後、もとの中国医科大学第一附属病院麻酔科の助教授になって、2011年新しい疼痛科を創って2013年教授になりました。今教室には医者9人、看護婦8人、大学院生9人がいます。研究に関しては、香川大学の研究を続けています。

平成27年に天津で行われた留学生同窓会において、医学部の先生方とお会いして、今後双方の研究者・学生交流を再開させようと話し合いました。

中国医科大学教授 宋 濤

中国医科大学 協定校との国際交流事業の概要

三宅 実、永竿 智久、和田 健司

はじめに

中国医科大学は中国東北地方の遼寧省の中心である瀋陽に位置し、医学教育・医療のセンターで、大規模な医科系総合大学です。1976年から、同大学は中国教育部が指定した留学生を受け入れられる最初の医科大学として、50あまりの国からの数百名の留学生を受け入れており、現在750名以上の留学生が学んでいます。

瀋陽は人口約800万の大都会であり、古くから日本との関連が非常に深い地域です。大学では日本語コースが設けられており、授業が日本語で行われているため、このコースを専攻した卒業生は流暢な日本語を話すことができます。

中国医科大学とは1997年8月に本学と国際交流協定を締結するに至っています。中国医科大学は本邦では他に慶応義塾大学、大阪大学、浜松医科大学、九州大学などと、また、海外ではアメリカ、カナダ、フランスをはじめ多くの国々の大学と交流協定を締結しています。

中国医科大学は歴史のある大学なので校舎によっては老朽化しているものもみられましたが、最近では基礎・臨床医学の建物を新築あるいは増築し、付属の総合病院を3カ所、専門病院を1カ所設けており、病床数は合わせて9,700床余りに上ります。特に附属病院(写真1)は最先端の設備を有し、教育・研究・診療の充実が急速に進んでいます。分子生物学や神経科学等に関しても特別棟があり、世界的な研究がなされており、中国東北部における医学研究の中心的役割を担っています。



令和7年度までの中国医科大学との交流実績およびイベント

平成27年8月8日には、中国天津農学院において、長尾学長、今井田医学部長、徳田国際交流委員長などが参加して香川大学帰国留学生ネットワーク中国支部総会が開催されました。その場に、中国医科大学の留学経験者も5名が参加し、学生交流や共同研究の実施について議論しました。

平成31年4月には、和田健司教授・前川泰子教授・永竿智久教授よりなる代表団が同校を訪問し、研究の進め方について論議しました。しかし令和元年から、COVID-19の世界的拡大により、交流が途絶えています。

今後の交流

今後、研究分野に関する情報を交換してマッチングを図ることを計画しています。令和2年度から令和5年度までは新型コロナウイルス感染症の影響で相互に交流が行えませんでした。さらに令和8年になって、日本政府と中国政府との関係が悪化し、交流は実施されていません。しかし今後、中国医科大学の研究者・学生とも可能であれば是非交流を再開したいと考えています。



河北医科大学

Hebei Medical University



●学部学生 9,781人（本科生のみ） ●大学院生 3,431人 ●教職員 11,186人 ●留学生 約300人

ホームページ <http://www.hebmu.edu.cn/>

交流協定締結年月日：2001年11月27日 主管学部：医学部 2018年5月21日大学間協定締結



国際交流の特色

メインキャンパスと図書館



令和7年6月6日河北医科大学学生と本学学生との交流会

河北医科大学は1894年に端を発し、他大学との統合により1995年5月に現在の大学となっている。河北省石家庄市に位置し、昔から東西の交通の要衝としても知られている。大学の構成は、学部14、大学院博士課程42、修士課程68のコースである。学生数は本科生10,491人、留学生400人（日本、韓国等）である。教職員は12,443人を超え、学生の指導にあたっている。さらに、河北医科大学は5箇所の附属病院を有し、非常に高水準な教育・研究・診療がなされている。また、日本をはじめ韓国、アメリカ、フランス、イギリス、パキスタン等の海外の大学と共同研究を活発に行っている。

交流実績（令和7年度）

受入・派遣	R7
学生の受入	7
学生の派遣	0
研究者・職員の受入	3
研究者・職員の派遣	3
オンライン交流参加者（本学）	0
オンライン交流参加者（相手機関）	0



教員からの声

河北医科大学は大きな規模の大学で、基礎医学院、口腔医学院、成人教育学院、薬学院、公共衛生学院、衛生技術学院、臨床医学院からなっている総合的な医学教育機関です。さらに、大学には第1から第6までの附属病院があり、非常に充実した臨床教育が行われています。特にこの中でも第4附属病院における食道がんの症例数は世界に類がないほど多く、諸外国の大学と共同研究が進められています。令和7年6月5日から8日河北医科大学学生7名および教員（Ma Jianzhi臨床学院党書記長、Na Jia医学教育学准教授）2名が来行され、本学学生および教職員研究者間で学術文化交流が実施されました。

医学部教授 三宅 実

学生からの声

河北医科大学から香川大学へ留学し、研究を指導していただき多くの留学生が学位を取得することができました。指導いただいた西山 成薬理学教授や三宅 実歯科口腔外科学教授には大変お世話になり感謝をしています。香川大学で指導を賜った先生方が我々の母校である河北医科大学に來られて、その講演を拝聴できたことは大変感慨深いものがありました。これからも河北医科大学との交流がますます盛んになることを祈っています。

香川大学で学んだ河北医科大学留学生一同

河北医科大学 協定校との国際交流事業の概要

三宅 実、永竿 智久

はじめに

河北医科大学は北京から南西へ約 300 km のところにある河北省石家庄に位置する。この地は昔から西安・北京・天津などへの交通の要衝であり商業都市として大変栄えた所である。近年、高速道路だけでなく高速鉄道（新幹線）も整備され、北京－石家庄は 1 時間 20 分程度で行くことができるようになった。石家庄市は人口が約 850 万人の大都市であり、上海に次いで製薬工業が盛んな都市である。またかつては紡績工業も盛んだったが現在は少ない。

石家庄市には他に河北師範大学、河北科技大学、河北経貿大学などの大学もある。河北医科大学は街中にあるとはいえ、一步門をくぐると静寂が取り戻せるほど広大な敷地に建っている。大学では基礎・臨床医学ともに充実した教育・研究・診療がなされているが、とくに臨床面では附属病院が 6 箇所もあり、それぞれ特色を生かした診療が行われている。この中でも第四附属病院は腫瘍の治療を主体とした病院で、際立っているのは食道がんの症例が世界に類がないほど多いことであり、本邦をはじめアメリカ、フランス、韓国等諸外国との共同研究も活発に行われている。

本学との交流協定は平成 13 年 11 月 27 日に締結されている。協定締結当初は留学生も少なく交流もわずかであったが、最近は教職員や学生の相互訪問が活発に実施されている。さらに平成 30 年 5 月 20 日には、当時の本学寛学長が河北医科大学を訪問し、学部間学術協定を大学間学術協定として昇格し新協定が結ばれた。今後、医学部だけではなく、農学部や工学部との学術交流の実施に向け体制が整ってきた。河北医科大学には、薬草学の研究分野もあり本学農学部との共同研究なども期待される。



西山医学部長の講演 2025 年 4 月 10 日河北医科大学にて



2025 年 6 月 6 日上田学長表敬訪問 香川大学幸町キャンパスにて

令和 7 年度における河北医科大学との交流実績およびイベント

4 月 9 日から 4 月 11 日の日程で、和田健司副学長、西山成医学部長、三宅実国際交流委員の 3 名が河北医科大学を訪問し、学術講演を行った。また河北医科大学の研究室や附属病院を訪問し、研究交流を行った。また医学部生とも交流を行った。6 月 5 日から 8 日の日程で、河北医科大学から医学生 7 名および教員（馬 建智 Ma Jianzhi 臨床学院党書記長、那佳 Na Jia 医学教育学准教授）2 名が来訪され、本学学生および教職員・研究者間で学術文化交流が実施された。

今後の交流の課題

令和 8 年度も引き続き、河北医科大学から学生および教員の来訪を予定していたが、日本国政府と中国との関係性が悪化し、4 月に予定されていた、上田夏生学長、和田健司副学長、西山医学部長が出席する予定であった河北医科大学での交流 25 周年記念行事が秋に延期された。学生交流も同様に延期されることになった。現時点では再開の見込みは残念ながら立っていない。一日も早い中国との関係改善を祈っている。



カルガリー大学医学部

Cumming School of Medicine, University of Calgary



- 学部学生(全学) 約3万3,000人 ●大学院生(全学) 約7,000人 ●医学部学生(Cumming School of Medicine) 約500人(MD課程) ●大学院生・研修医等(医学部) 約1,700人 ●医学部教職員 約3,000人
 - 留学生(全学) 約4,000人 ホームページ <https://cumming.ucalgary.ca/>
- 交流協定締結年月日：1989年7月31日 主管学部：医学部



国際交流の特色

カルガリー大学医学部(Cumming School of Medicine)は、1967年の設立以来、医学教育・研究の分野で国際的に高い評価を受けている。患者中心の統合型医学教育プログラムや先進的な研究活動を通じて、多くの医師・医学研究者を輩出するとともに、国際交流や国際貢献にも積極的に取り組んでいる。

香川大学医学部医学科との交流は1989年に開始され、以来、教員及び学生の派遣・受入れをはじめとする幅広い交流活動を継続している。また、この交流を契機として、三木町とカルガリー近郊のディズベリー町との交流も始まり、大学間交流を基盤とした地域レベルでの国際交流へと発展した。さらに、全学のStudy Abroad語学研修プログラムへと展開するなど、交流の裾野は着実に広がっている。

交流実績(令和7年度)

受入・派遣	R7
学生の受入	0
学生の派遣	0
研究者・職員の受入	0
研究者・職員の派遣	0
オンライン交流参加者(本学)	0
オンライン交流参加者(相手機関)	0



教員からの声

カルガリー大学医学部は、近年、その名称をCumming School of Medicineに変更しています。香川大学医学部は、1989年にカルガリー大学医学部と交流協定を締結して以来、継続的かつ活発な交流活動を展開してきました。以前は医学科から最大8名の学生を派遣していましたが、先方の学生交流方針の変更に伴い、近年は研究交流を中心とした連携へ移行しています。

また、平成25年度から全学学生を対象としたStudy Abroad語学研修プログラムが開始されましたが、医学部のカリキュラムとの調整が難しく、参加実績は限定的でした。その後は新型コロナウイルス感染症の影響もあり、派遣実績は途絶えています。

現在は交流全体の見直しを進めるとともに、教育・研究・地域貢献を一体的に推進する新たな連携体制の構築を進めています。特に、カルガリー市、アルバータ州及びディズベリー町との連携強化を図るとともに、研究交流のさらなる活性化に取り組んでいます。

医学部国際交流委員会委員・副学長・教授 和田健司

学生からの声

●カルガリーで授業を受けることで、今までの知識をより深めることもでき、将来のことも真剣に考え始めた時期に向こうの学生と交流し、刺激をうけたことで自分のモチベーションも大いに上がり、日本ではできない経験を経ることができました。向こうでの勉強も、出会った仲間も、雄大な自然も、どれもいい思い出となりました。

●カルガリー留学では、日本には決して味わえない、様々なことを体験し、学ぶことができました。僕の今後の人生において大きな財産になることと思います。このような経験をする機会を与えてくださった、諸先生方には心から感謝申し上げます。

過去のカルガリー大学への派遣学生

カルガリー大学医学部 協定校との国際交流事業の概要

和田 健司

はじめに

香川大学医学部は、1989年にカナダ・アルバータ州のカルガリー大学医学部との交流協定を締結して以来、積極的かつ継続的に交流活動を展開しています。

本交流事業では、毎年医学科から最大8名の学生を、国際交流に積極的に取り組むカルガリー大学医学部へ派遣しているほか、語学研修プログラムも実施しています。さらに、世界的に高い研究水準を有する同大学との共同研究の推進にも取り組んでいます。

なお、同医学部は近年、名称を「Cumming School of Medicine」へ変更しています。



令和7年度のカルガリー大学医学部との交流実績

1) 教育

カルガリー大学との医学部学生の相互交流については、先方の学生交流ポリシーの変更以降、派遣・受入れともに中断した状態が続いています。また、平成25年度からは全学の学生を対象とした夏季・春季の語学研修プログラム（Study Abroad Program）が開始されましたが、本学医学部のカリキュラムとの調整が必要であったことに加え、令和2年春以降は新型コロナウイルス感染症の影響により、海外派遣を全面的に停止せざるを得ない状況となりました。

その後、コロナ禍の影響が収束した現在においても、研究面でのつながりは維持されているものの、学生交流の再開には至っていません。このため、交流プログラムの見直しや改善を含め、学生交流の早期再開に向けた協議を進める必要があると認識しています。

2) 研究

学生交流は中断しているものの、医学部自律機能生理学講座とカルガリー大学薬理学教室との間では、共同研究に関する情報交換が継続されており、研究面での交流関係は維持されています。

3) 地域貢献

三木町の交流事業への協力を引き続き行っています。

今後の交流の課題

医学部学生の派遣及び受入れについては、先方の学生交流ポリシーの変更以来、中断した状態が続いており、再開に向けては交流事業全体の見直しが必要となっています。

今後は、カルガリー市の日本国総領事館の助言・支援も得ながら、教育・研究・地域貢献を一体的に推進する新たな交流の枠組みの構築を目指します。そのため、カルガリー市やアルバータ州、さらにはディズベリー町の企業等とも連携し、大学間交流にとどまらない多面的な協力関係の発展を図る予定です。

また、研究交流についても、共同研究や研究者交流のさらなる活性化が課題となっています。



ブルネイ・ダルサラーム国

ブルネイ・ダルサラーム大学

Universiti Brunei Darussalam

●学部学生 約3,000人 ●大学院生 約770人 ●教員 約470人 ●留学生 約370人

ホームページ <http://www.ubd.edu.bn/>

交流協定締結年月日：2009年11月8日 主管学部：医学部



国際交流の特色

ブルネイ・ダルサラーム大学（UBD）は、1985年に設立された総合大学である。学位取得コースは、国民及び外国人に開かれていて、政府による奨学金制度（教科書や交通機関及び宿泊費）が、ブルネイ国民に授与されている。1989年に最初の卒業生を送り出し、現在のツング・リンクのキャンパスは、1995年9月に正式にオープンした。医学部では英語での、Problem Based Learning（PBL）を主体としたチュートリアル中心の基礎教育を3年間行い、その後3-4年は英国、カナダ、オーストラリアの各大学医学部に編入し、臨床教育を受けて医師免許を取得する。2009年には大学間協定が結ばれ、さらに医学部とブルネイ国保健省との国際協力協定が結ばれた。特に医学部では、本学医学部との双方向性の学生交流が積極的に行われ、実績が積まれている。

交流実績（令和7年度）

受入・派遣	R7
学生の受入	9
学生の派遣	10
研究者・職員の受入	0
研究者・職員の派遣	4
オンライン交流参加者（本学）	0
オンライン交流参加者（相手機関）	0



教員からの声

ブルネイ国はアジアでも最も英語能力が優れ、治安が良く、政治的、経済的にも安定したイスラム教王国です。UBD医学部では英国式医学教育としてProblem-Based Learningを実施しており、国際的な視野を持った医師の教育で顕著な効果を挙げています。2006年から医学部間で協定を結び、さらに全学協定に発展しました。UBDにおける夏季医学教育コースや課題実習、香川大学における冬季医学セミナーやディスカバリープログラム等を介した相互派遣等、将来アジアで活躍するリーダーの育成にともに取り組んでいます。コロナ禍で人的な相互交流は一時停滞せざるを得なくなりました。令和4年度からは中期の研究インターンシップによる相互交流が開始されています。さらに2023年10月にUBDの学長先生を香川大学にお迎えし、2024年7月と12月には双方の大学で交流20周年記念が開催されました。コロナ禍前と同様の交流事業が再開され、人的交流もさらに深化してきております。

医学部附属病院 准教授 安田真之

学生からの声

私は2025年7月27日から約3週間、ブルネイダルサラーム大学（UBD）にて短期留学を行いました。

1週目は病院見学や観光を通じ、政府が医療費を全額賄う現地の医療制度や最先端の医療設備、世界最大級の水上集落といった独自の文化等を学びました。特に食文化における「想像以上の甘さ」には衝撃を受けました。

2週目以降はPBLやOSCEに臨みました。今回のPBLでは乳がんがテーマとなっており、疾患のメカニズムから細胞周期等の基礎医学の分野まで、かなり深く掘り下げるスタイルに驚かされるとともに、アウトプットを重視するUBDの教育スタイルに大きな刺激を受けました。

最終週のクロージングセレモニーでは、民族衣装を纏い、現地の学生とダンスや食事を楽しみました。私にとって、どれもかけがえない思い出となりました。このような貴重な機会を支えてくださった先生方や学務の方々、UBDの皆様に深く感謝いたします。

令和7年度医学科4年 馬地一稀

ブルネイ・ダルサラーム大学 協定校との国際交流事業の概要

日下 隆、和田 健司、安田 真之、市来 智子、小川 崇

はじめに

ブルネイ・ダルサラーム国は、1984年に独立した主権国家であり、ボルネオ島の北西部に位置し、三重県とほぼ同じ大きさです。アジアでも最も英語能力が優れ、治安が良く、政治的、経済的にも安定したイスラム教王国です。ブルネイ・ダルサラーム大学（UBD）は、1985年に設立された同国唯一の総合大学であり、学位取得コースは、国民及び国内外の外国人学生に開かれています。現在のキャンパスは1995年9月に正式にオープンしました。医学部では英語での、Problem Based Learning（PBL）を主体としたチュートリアル中心の基礎教育を3年間行い、その後3-4年は英国、カナダ、オーストラリアの各大学医学部に編入し、臨床教育を受けて医師免許を取得します。

令和7年度までのUBDとの交流実績や交流に関するイベント

香川大学医学部とUBD医学部との交流は2005年6月4日に、UBDの教員一行を本学医学部に迎えて医学研究交流講演会を開催したことに端を発します。9月にはブルネイ国ならびにUBDへの第一回の公式訪問を行い、両大学医学部間の国際協力事業に関する基本的合意が確認され、12月には駐日ブルネイ特命全権大使をはじめ関係者が来学し、両国の医学研究交流講演会が2回開催されました。

2006年度には本学医学部学生6名が、夏期休暇中にUBDにおける国際医学教育プログラムに参加しました。この活動は継続して行われています。また、教員1名がUBDおよび王立病院に招聘され、新生児の研究活動を開始するとともに、1名の後期研修医が王立病院において診療研修活動を行いました。また12月には本学医学部とUBD医学部間での学術国際交流に関する覚書の調印が行われました。

2007年度には、独立行政法人学生支援機構の国際大学交流学生セミナー（冬期医学セミナー）が採択され、12月にはUBDより8名の学生と医学部長および2名の教員を招待し、学生は2週間に渡って基礎医学や各臨床講座での実習や見学を行いました。2008年3月には、PEHINブルネイ国保健省副大臣が本学に来学され、附属病院、大学院教育や医学研究の視察が行われました。冬期医学セミナーは継続して行われています。

2009年10月には一井元学長がUBD卒業式に日本の大学では初めて招聘、出席され、同年11月に京都にて香川大学とブルネイ・ダルサラーム大学の大学間での国際協力協定が締結されました。また12月には香川大学医学部とブルネイ国保健省との国際協力協定がなされ、総合的な大学間協力と医学部のブルネイ国への医学協力体制が整いました。さらに2012年12月には、香川大学とUBDの国際交流実施細則（MOA）の調印がなされ、更なる交流の基盤が出来、その後の継続的な双方向性の交流が活発に行われています。

2020年度より新型コロナウイルス感染症蔓延に伴い、海外渡航は非常に困難でした。この状況下においても海外の連携大学と問題を共有し、協働してその解決に取り組むオンライン学習のCollaborative Online International Learning（COIL）であるGlobal Classroom（別記）や在ブルネイ日本大使館とも連絡を取り合い現地の状況把握に努めるなど、今までの関係を絶やさない活動を行いました。また、2022年から2025年まで、ブルネイ・ダルサラーム大学の学生を受入れ、医学科の学生を派遣しました。2024年7月23日には、「香川大学医学部とブルネイ・ダルサラーム大学との交流20周年記念事業」として、記念式典がブルネイで開催され、本学から教員等4名および学生7名が出席、12月10日には香川大学でUBDより教員等3名をお招きし、記念式典を開催しました。2025年度は、特別聴講学生・短期留学生として9名の学生を受入れ、医学科の学生を10名派遣しました。2025年7月には、教員4名が、UBDを訪問し、国際交流事業について協議しました。

今後の交流の課題

実質的な大学間レベルでの国際交流が展開され、国際共同研究が進んでいます。また、WEBを利用した双方向の交流や教員の交互派遣など、今後の発展が期待されます。



チェンマイ大学医学部

Chiang Mai University

タイ王国



●学部学生 1,180人 ●医学部教職員 450人 ●大学院生(医学部) 180人 ●留学生(全学) 430人

ホームページ <http://www.cmu.ac.th/en/index.php>

交流協定締結年月日：2011年7月29日 主管学部：医学部



チェンマイ大学病院



チェンマイ大学病院全景



ドイ・ステープ寺院

国際交流の特色

チェンマイ大学はチェンマイ旧市街の北西部に隣接した3,490エーカー（約14.12km²）の敷地に、3つのキャンパスがある。現在、17の学部と3つの研究所を持ち、約2,000人の教員に対して、2万人以上の学部生と、約7,500人の大学院生が学んでいる。1964年に設立されたチェンマイ大学医学部は、北タイ地域の医療・福祉と医学研究の中心機関となっている。チェンマイ大学医学部は日本と同じ6年制であり、1学年は160-180名からなっており、約1,200名の学生が医学を勉強している。

香川大学は、チェンマイ大学を東南アジアの教育・研究拠点と定め、今後複数の学部において、教育・研究面での国際交流事業を展開する方針を立て、医学部も2006年より交流を開始した。2011年には香川大学医学部およびチェンマイ大学医学部との実施細則（MOA）を締結し、2026年は交流20周年の節目の年となります。

交流実績（令和7年度）

受入・派遣	R7
学生の受入	1
学生の派遣	5
研究者・職員の受入	0
研究者・職員の派遣	0
オンライン交流参加者（本学）	0
オンライン交流参加者（相手機関）	0



三大学シンポジウムの参加者。チェンマイにて

教員からの声

チェンマイ大学はタイ北部の古い歴史と伝統・文化を有するチェンマイ市に位置しています。タイ第二の中核都市で、周囲を緑深い山々と仏教寺院に囲まれており、大変美しい都市です。

チェンマイ大学医学部および附属病院は、タイ北部の医療の中核として先進医療を積極的に取り入れており、近隣諸国への医療サポートも推進しています。香川大学の最も重要なパートナーの一つであり、医学部においても長期にわたって深い相互交流を行ってきました。

2022年に台湾の国立嘉義大学を加えた3大学合同シンポジウムをオンラインで開催し、2023年には香川大学、2024年にはチェンマイ大学で対面開催し、親交を深めました。次回は2027年に国立嘉義大学で再会できるのを楽しみにしています。

医学部 助教 鈴木裕美

学生からの声

チェンマイ大学医学部整形外科の実習では、日本に比べてバイク事故等による外傷疾患が非常に多く、その迅速な初期対応や治療を間近で学べたことが大きな収穫となりました。

また、現地の医学生との交流を通じて、学習姿勢や語学力の面で多くの刺激を受けました。課外活動では現地のラグビーチームに参加し、スポーツを通じて多様なバックグラウンドを持つ人々と深く交流できたことは貴重な経験になりました。

医学科6年 一ノ瀬直人

チェンマイ大学医学部の実習において、特に救急部門では交通外傷や感染症など、日本では比較的遭遇頻度の低い症例を多く経験しました。限られた医療資源の中で迅速な意思決定を行う現場に触れ、日本の医療体制との違いを強く認識しました。今回の経験を基に、より実践的な臨床能力と国際的視野を備えた医師を目指したいと思います。

医学科6年 小倉優仁

**チェンマイ大学医学部
協定校との国際交流事業の概要**

鈴木 裕美、宇山 徹、門田 球一

はじめに

香川大学は、チェンマイ大学を東南アジアの教育・研究拠点と定め、全学規模で教育・研究面での国際交流事業を展開する方針を立て、交流を推進しています。香川大学医学部においては、2006年8月に代表団を派遣して以来、チェンマイ大学医学部との交流が始まり、継続しております。

チェンマイ大学医学部は日本と同じ6年制であり、1学年は160-180名からなっており、約1200名の学生が医学を勉強しています。2011年9月に締結したMOAに基づき、教育（学生交流）および共同研究がさらに活性化されています。

令和7年度のチェンマイ大学医学部との交流実績

令和6年度に学生の受け入れを再開した国際交流ですが、今年度は令和7年4月14日から5月4日まで医学科5年生1名、令和8年3月3日から3月29日まで医学科5年生4名がチェンマイ大学医学部にて臨床実習を行いました。また、チェンマイ大学医学部4年生1名を耳鼻咽喉科で受け入れ、香川大学の医学部生との交流も楽しみました。

教育・研究交流

今年度は、教育・研究に関する対面あるいはオンラインでの具体的な交流実績はありませんでした。

一方で、今年度開催予定であった第4回香川大学・チェンマイ大学・国立嘉義大学合同シンポジウムに向けて、関係大学間で複数回の打ち合わせを行い、企画・準備を進めてきました。

これまでのシンポジウムを契機として教職員間の交流は生まれているものの、共同研究の具体的な実現には至っておらず、今後の重要な課題となっています。また、シンポジウムが開催されない年度においても、継続的な教育・研究交流の枠組みを構築する必要があります。

今後の交流の予定と課題

国立嘉義大学にて開催予定であった第4回香川大学・チェンマイ大学・国立嘉義大学合同シンポジウムは、国際情勢の影響により2027年度に延期となりました。今後は次回開催に向けて早期から準備を進めるとともに、シンポジウムを契機とした教職員間の国際共同研究が実現できるよう、3大学間の連携体制および支援体制の整備・強化が求められます。

また、これまでのシンポジウムを契機とした共同研究が十分に進展していないことや、シンポジウムが開催されない年度における継続的な教育・研究交流の機会が限られていることも課題です。今後は、医学部および附属病院全体で国際交流事業を積極的に推進するとともに、特に学生の双方向交流のさらなる充実に重点的に取り組む必要があります。



チェンマイ大学看護学部

タイ王国



Chiang Mai University

●看護学部学生 約600人 ●看護学部教員 約120人 ●大学院生 約650人 ●留学生 約180人

ホームページ <http://www.nurse.cmu.ac.th/web/>

交流協定締結年月日：2012年3月7日 主管学部：医学部看護学科



看護学部の学舎



チェンマイ大学



ドイ・ステープ寺院

国際交流の特色

チェンマイ大学は、1964年に開学した、タイで最初の地方総合国立大学である。看護教育は、当初、医学部内で実施されていたが、1972年に正式に看護学部が設置された。看護学部には、学部教育と修士・博士課程を有し、インターナショナルコース（全て英語の授業）も擁している。WHOセンターも兼ねており、日本だけでなく、世界からの学生留学を積極的に受け入れ、世界中の大学と交流を行っている。香川大学医学部看護学科は、チェンマイ大学看護学部からの短期留学生を受け入れるとともに本学からも、2週間程度の短期留学生を送り出している。2012年3月には、両大学看護学部間で「香川大学医学部看護学科及び大学院医学系研究科看護学専攻とチェンマイ大学看護学部及び大学院看護学系研究科との学術交流協定に関する実施細則（2017年10月より「香川大学医学部看護学科及び大学院医学系研究科看護学専攻とチェンマイ大学看護学部との学術交流協定に関する実施細則」）を交わし、交流を進めている。

交流実績（令和7年度）

受入・派遣	R7
学生の受入	5
学生の派遣	5
研究者・職員の受入	1
研究者・職員の派遣	0
オンライン交流参加者（本学）	0
オンライン交流参加者（相手機関）	0



教員からの声

チェンマイ大学との15年にわたる国際交流を通じ、今年も学生が医療制度や教育方法の違いを学ぶ貴重な機会となりました。継続教育を重視するタイの看護制度やデータ活用、VR演習など先進的な学びに触れ、学生の国際的視野が一層広がったと感じています。

医学部教授 山本美輪

学生からの声

2025年8月、私はチェンマイ大学看護学部への留学プログラムに参加しました。プログラム全体を通して医療に対する考え方や食事、文化の違いなど多くのことを学ぶことができました。タイでは看護師資格を一度取得した後5年ごとにテストを受験する必要があり、日々進化している医療に対応できる看護師が求められていることや授業の一部では国の保健データを活用してデータ分析を行い、より良い対策を考えたりするなど生徒の自主性や考える力を高めるような授業が組み込まれていると感じました。また、VRを使って看護技術の練習をしていたため、何度も繰り返し練習できることは良い点だと感じました。特に印象に残ったことは、病院見学の際にNICUの看護師の方がおっしゃった言葉で、「NICUに入院していてもお母さんと赤ちゃんの関係性を断ち切ることが無いように、毎日お母さんにはNICUに来るように伝えてお母さんの気持ちを聴くことが大事」だということです。このことは日本でもタイでも共通することで患者さんはこれまで一人で生きてきたわけではなく、家族や周りの人の支えがあって生きてこられたため、看護をする際にも患者さんと家族の関係を大事にしたいと改めて感じました。今回の留学では、香川大学の先生方や学務の皆様、CMUの先生方や学生さん、スタッフの方など多くの方々にお世話になりました。今回の経験をこれから活かし、より良い看護を学び続けていきたいと思います。

令和7年度看護学科3年 松本芽依

**チェンマイ大学看護学部
協定校との国際交流事業の概要**

山本 美輪、谷本 公重、川田 紀美子

はじめに

1990年に香川大学はチェンマイ大学と交流協定を締結し、2006年からは医学部間の学術交流を開始した。2010年には看護学科教員4名がチェンマイ大学看護学部を訪問し、2012年3月には学術交流協定に基づく実施細則（MOA）を締結した。その後、両大学は定期的に交換プログラムを継続し、本学の留学準備教育の充実により、チェンマイ大学からの留学生の評価も高まっている。2023年度には、コロナ感染症の影響を考慮しつつ短期交換留学を再開し、交流の再活性化が進んでいる。

令和7年度のチェンマイ大学看護学部との交流実績

1) International Nursing Seminar 2025 in Kagawa へのチェンマイ大学看護学部生受入れ

2025年5月26日～31日に開催した「International Nursing Seminar 2025 in Kagawa」では、チェンマイ大学看護学部より学生5名と教員1名を受け入れた。開講式後には医学部長表敬訪問を行い、日本の看護・看護教育、介護保険制度、在宅看護について学修した。また、両国における小児の主要死亡原因をテーマに本学2年生とディスカッションを行い、国際的視点からの学びを深め、基礎看護技術演習、附属病院病棟見学、ドクターヘリ講義、訪問看護同行など多様な実践的学習を提供した。さらに栗林公園での文化体験等を通じ、学生間交流が一層促進された。

2) 本学看護学科生6名の短期留学派遣

8月18日～25日に、本学看護学科学生5名をチェンマイ大学看護学部研修へ派遣した。学生は事前プログラムにおいて英語プレゼンテーション準備等を行い、語学力を強化したうえで研修に臨んだ。現地では、大学内での講義受講に加え、病院および地域での実習に参加し、チェンマイ大学看護学生のサポートを受けながらタイの看護の特徴を学び、日本との相違点や共通点について考察を深めた。学生間交流は双方にとって貴重な学習機会となった。また、渡航に際してはJASSO奨学金の支援を受け、学生の経済的負担を軽減することができた。今後も可能な限り負担軽減策を講じ、継続的な国際交流を推進していく予定である。

今後の交流における方向性と課題

本年度もチェンマイ大学との交換留学を無事に実施し、学生間の交流と学びは着実に深化した。一方で、派遣・受入れともに参加学生数には限りがあり、今後も双方の学生が参加しやすい交流機会の拡充が求められる。また、受入れ時の事前準備段階から主体的に関与する学生が少ないことから、本学学生の国際的な興味・関心を喚起する取り組みの強化が必要であることが明らかとなった。さらに、国際交流を持続的に発展させるためには、教員自身の国際的視野の拡大や海外連携に対する理解促進も不可欠であり、教員を含めた組織的なグローバル化推進策の検討が求められる。これらの課題を踏まえ、今後は学生・教員双方が国際交流に参画しやすい体制整備を進め、交流の質と継続性を高めていく必要がある。



ヤンゴン第一医科大学

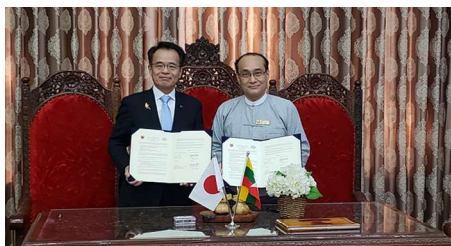


UNIVERSITY OF MEDICINE 1, YANGON

● 学部学生 約3,000人、● 大学院生 約1,300人、● 教職員 約1,000人

ホームページ <https://um1yangon.org>

交流協定締結年月日：2019年12月9日 主管学部：医学部



協定調印式の様子



<https://um1alumni.org/>より抜粋

国際交流の特色

ヤンゴン第一医科大学 (University of Medicine 1, Yangon) は、1907年に旧ラングーン総合病院附属の政府医学校 (Government Medical School) として設立された、ミャンマーで最も歴史と伝統を有する医科大学である。これまでに多数の医師及び医学研究者を輩出しており、現在も約3,000名の学部学生及び約1,300名の大学院生が在籍している。学部教育は7年制で実施されている。同大学はランマドー、パイロード及びタトンロードの3キャンパスを有し、Yangon General Hospital、New Yangon General Hospital、Central Women Hospital、Yangon Children Hospitalをはじめとするヤンゴン市内の主要病院や地域医療機関において臨床教育を実施している。特にNew Yangon General Hospital はJICAの支援を受けて整備された経緯があり、日本との結び付きが深い医療機関の一つである。

交流実績（令和7年度）

受入・派遣	R7
学生の受入	0
学生の派遣	0
研究者・職員の受入	0
研究者・職員の派遣	0
オンライン交流参加者（本学）	0
オンライン交流参加者（相手機関）	0



歓談の様子



協定調印後の記念写真（総長Prof. Zaw Wai Soe、副総長Prof. Myint Myint Nyeinらと）

教員からの声

ヤンゴン第一医科大学とは、医学部小児科学講座への大学院生受入れ（平成27年10月研究生受入れ、平成28年4月入学）を契機として、主に医学部を中心に活発な交流が開始されました。平成29年度及び30年度には医療技術等国際展開推進事業に採択され、新生児黄疸による後遺症の低減を目的としたプロジェクトを実施しました。関連病院であるCentral Women's Hospital（ヤンゴン）の新生児科医師を招聘し、香川大学医学部附属病院及び四国こどもととなの医療センターにおいて研修を実施するとともに、本学教員を現地へ派遣して指導に当たり（延べ人数：派遣25名、受入れ4名）、大きな成果を上げました。

また、JSPS平成30年度研究拠点形成事業「環境問題に対処するトランスディシプリナリー研究・実践のための国際ネットワーク構築」（愛媛大学、高知大学との共同事業）には、ヤンゴン第一医科大学が協力大学として参画しました。さらに、2017年度から2019年度にかけて、さくらサイエンスプランにより若手研究者計7名を招聘し、小児・周産期医療及び生活習慣病関連分野の研修を実施しました。一方、本学からも医師や大学院生等を派遣したほか、2018年9月及び2019年12月には教員が訪問し、交流協定締結に向けた協議を行いました。ヤンゴン第一医科大学は生命科学分野の研究も活発であり、複数学部による交流やASEAN諸国との連携拡大も期待されていました。

しかし、その後の新型コロナウイルス感染症の流行に加え、2021年の政変以降、ミャンマーでは武力衝突の長期化と政治的不安定な状況が続いています。令和2年度から3年度にかけて総務省（MIC）ミャンマー母子健康改善プロジェクトを完遂したものの、ヤンゴン第一医科大学との交流は実質的に休止せざるを得ない状況となっています。今後は、現地情勢及び国際情勢の推移を慎重に見極めながら、交流再開の可能性を検討していく必要があります。

医学部国際交流委員会委員・副学長・教授 和田健司

ヤンゴン第一医科大学 協定校との国際交流事業の概要

日下 隆、安田 真之、和田 健司

はじめに

香川大学医学部とヤンゴン第一医科大学との交流は、医学部小児科学講座における大学院生の受入れ（平成 27 年 10 月研究生受入れ、平成 28 年 4 月大学院入学）を契機として開始されました。

その後、平成 29 年度及び 30 年度に採択された医療技術等国際展開推進事業「新生児黄疸による後遺症を減少させるプロジェクト」を通じて交流が大きく発展しました。本事業では、ヤンゴン市の Central Women's Hospital の新生児科医師を招聘し、香川大学医学部附属病院及び四国子どもとおとなの医療センターで研修を実施するとともに、本学教員を現地へ派遣して技術指導を行いました。その結果、重症児治療の必要回数が減少するなどの臨床的成果に加え、現地医師の負担軽減にも寄与しました。

また、JSPS 研究拠点形成事業「環境問題に対処するトランスディシプリナリー研究・実践のための国際ネットワーク構築」（愛媛大学、高知大学と共同実施）にヤンゴン第一医科大学が協力大学として参画したほか、平成 29 年度から令和元年度までのさくらサイエンスプランでは若手研究者計 7 名を招聘し、生活習慣病及び新生児医療分野の研修を実施しました。

さらに、平成 30 年 9 月及び令和元年 12 月の本学教員による訪問を経て交流協定締結に向けた協議が進められ、令和元年 12 月 9 日に大学間交流協定が締結されました。

一方、その後の新型コロナウイルス感染症の流行とミャンマー国内の政変は交流活動に大きな影響を与えました。しかしながら、総務省（MIC）「ミャンマー母子健康改善プロジェクト」（令和 2～3 年度）を医療 ICT 支援事業として実施し、計画変更を余儀なくされながらも、現地の母子保健の向上につながる成果を挙げることができました。

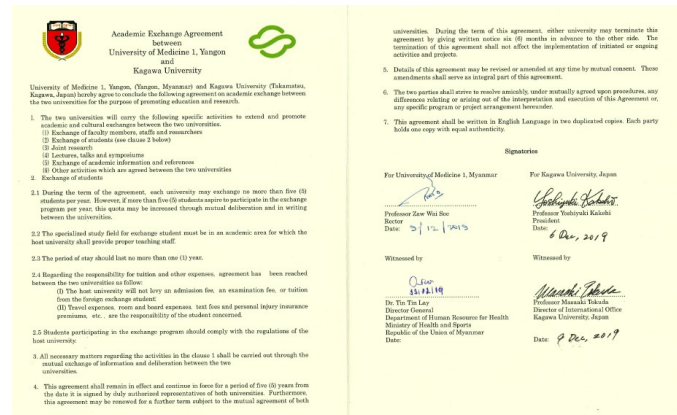
令和 7 年度のヤンゴン第一医科大学との交流実績

令和元年末からの新型コロナウイルス感染症の流行に加え、令和 3 年以降のミャンマー国内の政情不安により、協定校の教育・研究活動は大きな影響を受けました。その結果、令和 7 年度においても前年度に引き続き、対面及び遠隔を含めた交流活動を実施することができませんでした。

さらに、令和 7 年 3 月 28 日に発生した大地震により、ミャンマーは深刻な被害を受けました。本学は協定校との友好関係を維持するため、学長名によるお見舞いの書簡を送付するとともに、現地の状況を注視しています。

今後の交流の課題

今後は、ミャンマー国内の社会情勢及び協定校の教育・研究活動の回復状況を注視しながら、双方にとって安全かつ実効性のある形で、交流事業の段階的な再開を目指していきます。



（写真）2019 年 12 月に締結された協定書



プトラ・マレーシア大学 Universiti Putra Malaysia

マレーシア



●学生 約28,000人(学部・大学院含む)、●教員 約1,700人、●留学生 約4,000人

ホームページ <http://upm.edu.my/>

交流協定締結年月日：2019年11月18日 主管学部：医学部



国際交流の特色

プトラ・マレーシア大学(Universiti Putra Malaysia: UPM)は、1931年に設立された農業学校を起源とする大学である。1947年にマラヤ農業大学が設立され、1973年には農学部、林学部及び獣医学部を擁するUniversiti Pertanian Malaysiaとして発展した。その後、教育・研究分野を幅広い科学技術領域へ拡大し、1997年に現在のUniversiti Putra Malaysiaへ改称された。現在は、マレーシアを代表する研究大学の一つとして、科学技術分野を中心に重要な役割を担っている。首都クアラルンプール南郊のセランゴール州セルダンに広大なキャンパスを有し、隣接する行政都市ブトラジャヤとの連携も活発である。農学、獣医学、工学、理学、医学・健康科学、コンピュータ科学、バイオテクノロジー、環境科学、人文・社会科学など幅広い分野を擁する総合大学であり、ハラル製品研究所や熱帯雨林・林産研究所をはじめとする特色ある研究拠点を有している。UPMはマレーシア政府が指定する研究大学(Research University)の一つであり、国際的にも高い評価を受けている。2025年QS世界大学ランキングでは世界148位にランクされており、教育・研究力に加えて国際性の高さにも定評がある。

交流実績(令和7年度)

受入・派遣	R7
学生の受入	0
学生の派遣	7*
研究者・職員の受入	0
研究者・職員の派遣	2*
オンライン交流参加者(本学)	0
オンライン交流参加者(相手機関)	0

*医学部以外の教職員・学生を含む



2016年10月、Soh Kim Lam 看護部門長、Salimah Japar 講師が、本学、前インターナショナルオフィス長を表敬訪問しました。

教員からの声

UPMはマレーシアを代表する研究大学の一つであり、本学のマレーシアにおける重要な協定校です。2016年10月にUPMの看護学分野の教員らが本学を訪問したことを契機として交流が始まり、2017年度から2019年度にかけて、さくらサイエンスプランにより若手研究者計6名を招聘し、生活習慣病関連分野の研修を実施しました。一方で、本学教員もUPMを訪問して協議を重ね、2019年11月18日に大学間交流協定の締結に至りました。その後も交流は継続しており、コロナ禍においても大学院生1名が本学大学院医学系研究科に入学し、博士号を取得してUPMに復帰しています。さらに、2023年3月には全学を対象とした短期留学プログラムが開始され、20名の香川大学生を派遣しました。以後、本プログラムは継続的に実施されており、UPMからの学生及び教職員の受入れも続いています。このように、両大学の連携は着実に発展・強化されています。

医学部国際交流委員会委員・副学長・教授 和田健司

学生からの声

2024年2月25日から3月4日までの間、マレーシア・多文化体験プログラムに参加しました。約一週間という短い時間でしたが、プログラム内容は朝から夜まで盛りだくさんで、UPMにてマレーシアの文化や宗教などについて講義を受けたり、宗教施設や観光施設を訪れたり、UPMの学生であるバディたちにマレーシアで人気のスポットやレストランに連れて行ってもらったりと充実した期間を過ごすことができました。特にUPMの先生方やバディ含む学生たちと過ごした時間は印象的で、彼らの温かさは私にとってかけがえのない思い出となりました。全体を振り返ると、英語に興味がある人はもちろんですが、他国の宗教観や文化に興味がある人、新たに友達を作りたい人などたくさんの人にとって有意義なものになったと思います。

令和5年度 医学科2年 杉本美咲

プトラ・マレーシア大学 協定校との国際交流事業の概要

和田 健司

はじめに

平成 28 年 10 月に、プトラ・マレーシア大学（UPM）の Soh Kim Lam 看護部門長及び Salimah Japar 講師が香川大学を訪問し、教職員・学生交流や共同研究の可能性について協議したことを契機として、両大学間の交流が開始されました。

平成 29 年度からは、さくらサイエンスプランにより医学健康科学部及び教育学部から若手教員・大学院生計 6 名を招聘し、生活習慣病関連分野の研修を実施しました。また、医学部徳田教授による UPM での招待講演や、平成 30 年度の和田教授による訪問を通じて交流が発展し、令和元年 11 月 18 日に大学間交流協定が締結されました。

さらに、令和元年度には大学院生 1 名が医学研究科に入学して博士号を取得後に帰国し、その後も研究交流が継続しています。

令和 7 年度のプトラ・マレーシア大学との交流実績

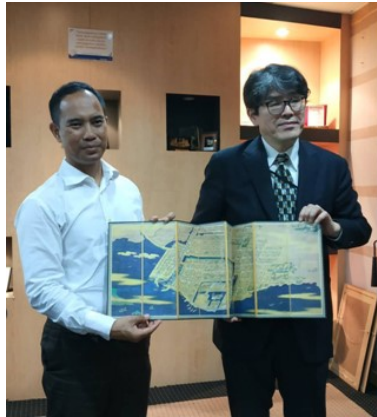
コロナ禍以降、UPM への学生派遣は主としてインターナショナルオフィス主催の超短期留学プログラムを通じて実施されており、医学部学生も参加してきました。令和 7 年度

には、8 月 25 日から 9 月 2 日までの 9 日間、教員 2 名及び学生 7 名が UPM を訪問し、交流を行いました。さらに、令和 8 年度にも 8 月 23 日から 9 月 1 日までの 10 日間、13 名程度の学生を教員とともに派遣する予定です。また、UPM からの学生及び教職員の香川大学訪問も定着しています。

一方で、以前から実施していたさくらサイエンスプランによる若手教員・研究者の研修交流については、早期の再開が望まれています。

今後の交流の課題

学生交流は医学部から全学レベルへと発展し、超短期留学プログラムによる学生派遣や、UPM 学生の受入れプログラムが継続的に実施されています。今後は、医学部学生の積極的な参加を促進するとともに、教職員交流や共同研究のさらなる発展を図ることが課題となっています。



2019 年 1 月に和田国際交流委員会委員長がハラル製品研究所（左）、医学部（右）、食品科学部等を表敬訪問し、詳細な交流内容等について論議しました。





カリフォルニア大学マーセド校

University of California, Merced



●学部学生 約9,100人、●大学院生 約900人、●教員・研究者 約1,400人 アメリカ合衆国

ホームページ <https://www.ucmerced.edu/>

交流協定締結年月日：2019年6月14日 主管学部：医学部



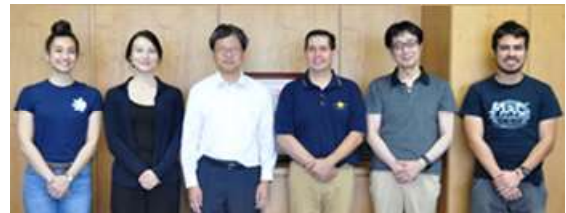
国際交流の特色

news.ucmerced.edu

カリフォルニア大学マーセド校（UC Merced）は、2005年に開学したカリフォルニア大学（UC）システムで最も新しいキャンパスであり、21世紀に米国で新設された数少ない研究大学の一つである。ヨセミテ国立公園に近いカリフォルニア州中央部に位置し、サンホアキン・バレー地域の高等教育機会の拡充と地域発展に重要な役割を果たしている。また、先進的な研究活動、持続可能なキャンパス設計及び地域経済の活性化を推進する拠点としても機能している。現在は、工学部（School of Engineering）、自然科学部（School of Natural Sciences）及び社会・人文・芸術学部（School of Social Sciences, Humanities and Arts）の3学部を擁し、幅広い学部・大学院教育プログラムを提供している。特に生命科学、環境科学、データサイエンス、バイオエンジニアリング分野の研究に強みを有しており、研究大学として急速な発展を遂げている。広大なキャンパスでは施設整備と規模拡大が継続して進められており、今後のさらなる発展が期待されている。

交流実績（令和7年度）

受入・派遣	R7
学生の受入	0
学生の派遣	1
研究者・職員の受入	0
研究者・職員の派遣	0
オンライン交流参加者（本学）	0
オンライン交流参加者（相手機関）	0



2019年7月29日に、米国カリフォルニア大学・マーセド校（University of California Merced）の自然科学部・Rudy Ortiz教授と学生3名より、上田医学部長（当時・現学長）へご挨拶がありました

教員からの声

カリフォルニア大学マーセド校は、生命科学分野を中心に高い研究力を有する研究大学です。平成18年度以降、香川大学医学部薬理学講座との共同研究が継続されており、研究者や大学院生の交流、多数の共著論文の発表などの成果を挙げています。こうした実績を基に、2019年6月14日に部局間交流協定が締結されました。協定締結後の2020年1月から3月には医学部学生1名を派遣し、研究活動を実施しました。その後、新型コロナウイルス感染症の影響により人的交流は一時停止したものの、共同研究は継続されました。近年は人的交流も再開されており、今後さらなる研究交流及び学生交流の発展が期待されます。

医学部国際交流委員会委員・副学長・教授 和田健司

学生からの声

2025年11月から約3週間、アメリカのカリフォルニア大学マーセド校に留学し、Rudy Ortiz教授の研究室で研究活動に参加しました。タンパク質アッセイ法やウェスタンブロット法などの基礎的な実験手技を学ぶとともに、研究室ミーティングや学生発表にも参加し、アメリカの大学における研究環境や学生生活を体験することができました。今回は、ビザ取得や大学との連絡など、多くの準備を自分自身で行いました。その過程を通じて、自ら情報を収集し主体的に行動することの重要性を学びました。また、現地では感謝祭休暇の影響により当初の予定より実習期間が短くなりましたが、海外では自ら積極的に確認しなければ必要な情報を得られないことを実感しました。今回の留学を通して、研究手技だけでなく、異なる文化や環境の中で主体的に行動する姿勢の大切さを学ぶことができました。この経験を今後の研究や医療活動に活かしていきたいと思えます。

令和7年度医学科4年 杉本美咲

カリフォルニア大学マーセド校 協定校との国際交流事業の概要

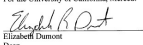
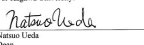
和田 健司

はじめに

カリフォルニア大学マーセド校（UC Merced）が所在するマーセド市は、カリフォルニア州中部の内陸部に位置し、サンフランシスコから車で約2時間半、ロサンゼルスからは約5～6時間の距離にあります。人口約9万人の農業を基幹産業とする都市であり、世界的に知られるヨセミテ国立公園への玄関口としても知られています。

UC Merced は2005年に開学したカリフォルニア大学（UC）システムで最も新しいキャンパスであり、医学部は有していませんが、研究大学として急速な発展を遂げています。特に生命科学、環境科学、データサイエンス、持続可能性研究などの分野で高い研究力を有し、学際的研究を推進する先進的な大学として注目されています。

香川大学医学部との交流は平成18年度に始まり、以来、主として薬理学講座を中心に活発に継続されており、毎年、研究者に加えて多くの大学院生や若手研究者を受け入れてきました。こうした実績を背景として、令和元年度に部局間交流協定が締結され、医学科3年次生1名が令和2年1月26日から3月12日までUC Mercedを訪問し、研究活動に従事しました。その後も学生の派遣・受入れが継続しています。

  ACADEMIC EXCHANGE AGREEMENT BETWEEN THE REGENTS OF THE UNIVERSITY OF CALIFORNIA ON BEHALF OF THE SCHOOL OF NATURAL SCIENCES OF ITS MERCED CAMPUS AND THE FACULTY OF MEDICINE AND GRADUATE SCHOOL OF MEDICINE, KAGAWA UNIVERSITY The Regents of the University of California on behalf of its Merced Campus ("UC Merced") and the Faculty of Medicine and Graduate School of Medicine, Kagawa University ("Kagawa") enter into this Academic Exchange Agreement ("Agreement") to further academic, educational, and cultural exchange between the two institutions as follows: SECTION 1: OBJECTIVE Through this Agreement, UC Merced and Kagawa (collectively the "Parties," individually the "Party") establish an academic relationship that allows qualified faculty members, researchers, post-doctoral scholars, and students ("Exchange Participants") from UC Merced, School of Natural Sciences and Kagawa to participate in a mutual exchange for the purpose of biomedical and basic research. SECTION 2: SCOPE OF COLLABORATION 2.1 Student and Post-Doctoral Scholar Exchange Each home institution may recommend students and post-doctoral (PD) scholars for participation in the exchange, based on the students' or PD scholars' academic performance, good conduct, and overall suitability for participation. While participating in the exchange, student or PD Exchange Participants will engage in research, including through the use of laboratories and other facilities of the host institution, under the guidance of host institution faculty members and/or researchers. Each institution may exchange no more than a total of five (5) students or PD scholars per year. However, if more than five (5) students or PD scholars aspire to participate in the exchange program per year, this quota may be increased by mutual agreement in writing between the Parties. The duration of a student exchange is limited to no more than (1) one year, unless agreed to in writing by the Parties. 2.2 Faculty Member and Researcher Exchange Each home institution may recommend faculty members and researchers for participation in the exchange. While participating in the exchange, faculty member and researcher Exchange Participants will engage in research or other modes of scientific exchange, including through the use of laboratories and other facilities of the host institution, and explore collaborative academic publication and other academic activities with host institution faculty members and/or researchers.	SECTION 3: INSURANCE Exchange Participants are required to maintain health insurance in accordance with governmental regulations and the policies of the host institution. SECTION 4: HOUSING AND EXPENSES Exchange Participants are responsible for their own travel, housing and living expenses in their respective host country. The Parties will provide Exchange Participants with assistance in locating housing options, but cannot guarantee the success of said assistance or housing availability. SECTION 5: VISAS Exchange Participants are responsible for obtaining visas and related documents necessary to pursue their activities at their respective host institution and are responsible for maintaining valid and legal immigration status for the entire duration of their participation in the exchange. UC Merced staff will work with the UC Merced Office of International Affairs to coordinate visas for Kagawa Exchange Participants. Kagawa will similarly work with its international office to coordinate visas for UC Merced Exchange Participants. Exchange Participants are responsible for paying government visa application and processing fees, including the Student Exchange Visitor Information System (SEVIS) fees. SECTION 6: FINANCIAL MANAGEMENT No money will be exchanged between the institutions who are Parties hereto. The Parties agree that Exchange Participants, including students, will not enroll in any courses and, as such, will not be subject to tuition fees. All Exchange Participants are responsible for paying for their own travel, housing and other living expenses, as well as any additional expenses, such as health insurance, library, facilities, and government and university visa fees. In the event that collaborative activities that develop from this agreement lead to the successful acquisition of extramural funding that cover or offset exchange costs, said funds will be used to facilitate the exchange. SECTION 7: ACADEMIC CREDIT AND NO DEGREES AWARDED Exchange Participants, including students, will not be awarded any academic credit or degree status by their respective host institution by virtue of participation in the exchange program. Any credit for participation in the exchange shall be approved by the home institution at its sole discretion. Nothing shall preclude an Exchange Participant from applying to the host institution for acceptance in a degree program, subject to payment of all application fees to the host institution and completion of the institution's other application requirements. SECTION 8: INTELLECTUAL PROPERTY RIGHTS Neither UC Merced nor Kagawa shall infringe, in any way, the other Party's intellectual property rights. SECTION 9: LAWS AND REGULATIONS Exchange Participants are subject to laws of the national, state, and local jurisdictions in which each host institution is located, and are expected to comply with these laws. In addition, Exchange Participants are expected to comply with the policies and procedures of the both their home and host institutions. SECTION 10: DURATION, MODIFICATION AND TERMINATION The Agreement shall be effective on the date it is fully signed, by both Parties, and will remain in effect for five (5) years. The Agreement may be amended as agreed to in writing by both Parties, or terminated by either Party upon at least six (6) months' notice before the termination date.	SECTION 11: LANGUAGE OF AGREEMENT The Agreement is written in English, and no translation into any other language shall be taken into consideration. The Agreement has been executed in duplicate originals by duly authorized representatives of the two Parties. Each Party shall retain one (1) original copy thereof respectively. For the University of California, Merced:  Elizabeth Dumont Dean School of Natural Sciences Date: 6/5/2019 For Kagawa University:  Naotaka Ueda Dean Faculty of Medicine & Graduate School of Medicine Date: 6/14/2019
--	--	---

令和7年度のカリフォルニア大学マーセド校との交流実績

昨年度に引き続き、薬理学講座において、UC Merced 校の Rudy M Ortiz 教授による共同研究を実施継続しており、本学から学部学生1名を現地に派遣しました。協定締結から6年を経ましたが、これまでの活発な交流を鑑みて昨年度に更新となりました。今後の交流のさらなる発展が期待されます。

今後の交流の課題

今後も薬理学講座を中心として、引き続き共同研究を継続します。学生交流については、令和7年度も学生の派遣と受入を継続する方向で検討中です。



カンボジア王国

カンボジア健康科学大学

University of Health Sciences (Cambodia)

●学生 約7,000人、●教職員 約1,800人

ホームページ <https://uhs.edu.kh/>

交流協定締結年月日：2019年10月14日 主管学部：医学部



国際交流の特色

健康科学大学（University of Health Sciences: UHS）は、1946年に設立されたカンボジアを代表する医療系高等教育機関である。その起源は医学士官学校に遡り、その後、カンボジア王立医学学校を経て発展した。1970年代の内戦及びボル・ポト政権下において大きな影響を受けたものの、1980年に医学、薬学及び歯学分野の教育機関として再建され、1997年に現在の健康科学大学へ改組された。

現在は医学部、薬学部、歯学部、看護学部及び関連医療専門職教育課程を擁するカンボジア最大級の医療系大学であり、医療・保健分野全般を担う人材養成の中核機関となっている。教育・研究活動に加え、薬学分野では薬用植物や天然物由来の生理活性物質に関する研究も行われている。

また、UHSはカルメット病院、クメール・ソビエト友好病院、国立小児病院、クンタボパ病院、ブレアコサマック病院、Ang Duong病院、国立母子保護センター（NMCHC）をはじめとする主要医療機関と連携し、臨床教育及び実践的な医療人材育成を実施している。カンボジアの医療・保健分野を支える中核大学として、教育、研究及び医療サービスの向上に重要な役割を果たしている。

交流実績（令和7年度）

受入・派遣	R7
学生の受入	0
学生の派遣	0
研究者・職員の受入	0
研究者・職員の派遣	0
オンライン交流参加者（本学）	0
オンライン交流参加者（相手機関）	0



2018年6月5日に、徳田前副学長(当時)、清水教授(慢性期成人看護学、当時)をはじめとする本学代表团がUHS Saphonn Vonthanak学長を表敬訪問し、国際交流の可能性を論議しました。その後1年を経て、2019年10月に大学間交流協定が締結されました。

教員からの声

UHSは唯一の国立医科大学として最も高い評価があり、香川大学の重要なパートナーです。2017-19年度JICA草の根技術協力事業「衛生教育改善のための学校保健室体制の構築プロジェクト」、JSPS研究拠点形成事業、JSTさくらサイエンスプラン、2019-20年度医療技術等国際展開推進事業、2021-22年度文部科学省「日本型教育の海外展開推進事業（EDU-Portニッポン）調査研究事業で協働し、2021年にはUHS看護教員5名が「学校保健データ管理オンライン研修」に参加し、教材190冊を香川大学から提供し活用された。2022年度には現地政府との「学校健診データマネージメント研修」に看護教員3名が参加しました。協定の下、研究者・学生交流が期待されます。 元医学部教授 清水裕子

カンボジア健康科学大学 協定校との国際交流事業の概要

和田 健司、坂中 尚哉

はじめに

香川大学とカンボジアとの交流は、平成 22 年に締結したバタンバン大学および王立農業大学との部局間交流協定（農学部）に始まります。平成 29 年 2 月からは、カンボジア（カンダール州カンダルスタン郡）の小学校 32 校における衛生教育の向上を目的として、JICA 草の根技術協力事業「カンダルスタン郡の衛生教育改善のための学校保健室体制の構築」を実施しました。これを契機として、医学部と University of Health Sciences (UHS) の教員との交流が始まり、その後、EDU-Port ニッポン、JSPS 研究拠点形成事業、JST さくらサイエンスなどの様々なプロジェクトを通じて交流を深めてきました。こうした活発な交流を背景として、令和元年 10 月 14 日には大学間交流協定の締結に至りました。



令和 7 年度のカンボジア健康科学大学との交流実績

上記の活発な交流活動を契機として、令和 5 年度に 2 名、令和 6 年度に 2 名、令和 7 年度に 2 名の同大学関係者あるいはカンボジアの医療従事者が JICA 長期研修員として香川大学大学院医学系研究科に在籍し、公衆衛生学講座および医療情報学講座で研修・研究活動を行いました。令和 8 年度についても、1 名の受入れが見込まれています。

また、コロナ禍以降、正式な学部間学生交流は再開されていませんが、様々な国際協力事業の企画・立案が進められており、交流発展への機運が高まっています。当該大学の参画を得てカンボジアで実施した JICA 事業及び EDU-Port ニッポン事業の成果は、令和 6 年 3 月 12 日に開催された文部科学省 EDU-Port ニッポンシンポジウムにおいて紹介されました。また、新たな国際協力プロジェクトの共同提案に加え、ボランティア団体に所属する医学部学生が当該大学を訪問して活動を行うなど、交流は着実に進展しています。



↑ 令和 3 年度オンライン研修



令和 4 年度現地モデル事業 ↑

今後の交流の課題

このように、これまでの交流を通じて培われた緊密な協力関係を基盤として、学生交流の再開の検討や新たな JICA 事業等への共同応募が進められており、今後の交流のさらなる発展が大いに期待されます。特に、JICA 長期研修員（国費留学生）によるカンボジア医療従事者の継続的な受入れが定着していることから、教育・研究両面における連携の強化及び研究交流の一層の発展が期待されます。



ニューカッスル大学医学部

イギリス

The Faculty of Medical Sciences,
Newcastle University



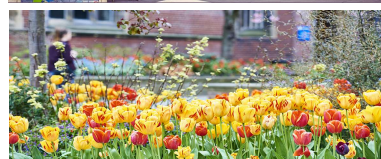
●学部学生 約22,000人、●大学院生 約8,000人、●教職員 約6,000人

ホームページ <http://www.ncl.ac.uk/>

交流協定締結年月日：2020年6月5日 主管学部：医学部



<https://www.ncl.ac.uk/who-we-are/facilities/>より抜粋



<https://www.ncl.ac.uk/study/campus/#library/>より抜粋

国際交流の特色

ニューカッスル大学は、1834年に設立された医学・外科学を起源とし、現在では英国を代表する研究型総合大学の一つである。英国の主要研究大学で構成されるラッセル・グループに加盟しており、教育・研究の両面で高い評価を受けている。近年のQS世界大学ランキングでは世界トップ150校前後に位置し、特に研究力、学生満足度及び国際性の高さに定評がある。医学部は長い歴史と優れた教育実績を有しており、香川大学医学部との交流は1992年に開始された。以来、継続的に学生を派遣しており、本学医学部における代表的な海外臨床実習プログラムの一つとなっている。ニューカッスル大学での学修・臨床実習は、学生の国際的視野の拡大や臨床能力の向上に大きく寄与しており、近年も高い人気を維持している。

交流実績（令和7年度）

受入・派遣	R7
学生の受入	0
学生の派遣	2
研究者・職員の受入	0
研究者・職員の派遣	0
オンライン交流参加者（本学）	0
オンライン交流参加者（相手機関）	0



<https://www.ncl.ac.uk/study/campus/#library/>より抜粋

教員からの声

医学科では、ニューカッスル大学との協力のもと、医学実習Ⅱの一環として毎年4～5名の学生を4月から5月にかけて約6週間派遣し、臨床実習を実施しています。現地では複数の診療科をローテーションしながら実習を行い、患者診療への参加に加えて、英国の医療従事者や学生との交流を通じて、国際的な視野と臨床能力を養う貴重な機会となっています。また、2020年6月には香川大学医学部とニューカッスル大学医学部との間で部局間交流協定が締結されました。その後も交流は継続しており、令和5年度にはニューカッスル大学の教員を招へいし、講義及び実技指導を実施しました。さらに、令和6年度及び令和7年度にはそれぞれ4名、2名の学生を派遣し、臨床実習を行いました。こうした交流を通じて、教育及び研究面での連携強化に向けた協議も進められており、今後も継続的な発展が期待されています。

医学部国際交流委員会委員・副学長・教授 和田健司

学生からの声

2025年4月から6週間、イギリスのニューカッスル大学に留学し、Royal Victoria Infirmary (RVI) および Freeman Hospitalにおいて、感染症科と脳卒中科で臨床実習を行いました。感染症科では外来見学や回診への参加、症例発表、HIV・B型肝炎・結核などの専門外来の見学を通じて、多様な感染症診療を学ぶことができました。また、さまざまな国や地域から来た患者さんへの対応や通訳システムの活用を通じて、多文化社会における医療の重要性を実感しました。特に印象に残ったのは、患者中心の医療と多職種連携の充実です。医師や看護師をはじめとする医療スタッフが密接に連携し、患者さん一人ひとりに寄り添った診療を行っていました。脳卒中診療では、急性期治療からリハビリテーションまで効率的な体制が整えられており、質の高い医療を支える仕組みを学ぶことができました。今回の留学を通して、日本とイギリスそれぞれの医療の長所を理解するとともに、異なる文化や価値観の中で医療を実践する視点を身につけることができました。この経験を今後の学習や臨床に活かし、患者さんに寄り添える医師を目指して努力していきたいと思っています。 令和7年度医学科6年 石井崇晶

ニューカッスル・アポン・タイン大学医学部

協定校との国際交流事業の概要

門田 球一、横平 政直、和田 健司

はじめに

ニューカッスル・アポン・タインは、イングランド北東部に位置する主要都市であり、市域人口は約 30 万人、都市圏人口は 80 万人を超える北東イングランドの中心都市です。ニューカッスル大学は、1963 年にダラム大学から独立して設立された総合研究大学で、現在は約 3 万人の学生が在籍しています。同大学は、英国を代表する研究型大学で構成されるラッセル・グループの一員であり、教育・研究の両面で世界的に高い評価を受けています。特に医学、生命科学、工学、エネルギー、データサイエンス等の分野に強みを有し、国際的な研究ネットワークの中で重要な役割を担っています。また、英国国内外の大学評価においても高い評価を維持しており、優れた教育環境と研究力を兼ね備えた大学として広く認知されています。



ニューカッスル大学医学部との交流は 1992 年に開始され、1994 年からは毎年 1 名の学生を 6～8 週間の臨床実習に派遣してきました。その後、2000 年に派遣人数を 2 名、2008 年には 3 名へ増員し、現在も継続的に 4～5 名程度の学生を派遣しています。また、長年にわたる交流の成果として、2020 年 6 月 5 日に香川大学医学部とニューカッスル大学医学部との間で部局間交流協定が締結されました。その過程において、2019 年 10 月 4 日から 7 日にかけてニューカッスル大学医学部の Dr. Matthias Schmid 氏を香川大学医学部に招へいし、講義や臨床手技指導を実施するとともに、ニューカッスル大学で研修経験を有する本学卒業生との交流会を開催しました。こうした継続的な交流と相互理解の深化が、協定締結につながりました。

令和 7 年度のニューカッスル・アポン・タイン大学医学部との交流実績

世界的に猛威を振るった新型コロナウイルス感染症の流行もようやく収束し、令和 6 年度及び令和 7 年度には、ニューカッスル大学に医学科 6 年生 4 名、2 名を派遣し、臨床実習を実施しました。

今後の交流の課題

令和 8 年度においても、4 月から 5 月にかけて学生をニューカッスル大学へ派遣する予定です。加えて、共同研究の推進やニューカッスル大学から本学への学生受入れの可能性についても協議を進めており、教育・研究の両面における交流のさらなる発展が期待されます。





グラスゴー大学医学部

School of Medicine, Dentistry and Nursing

The University of Glasgow

イギリス



●学部学生 24,200人 ●大学院生 14,000人 ●教職員 5,800人

ホームページ <https://www.gla.ac.uk/>

交流協定締結年月日：2025年1月14日 主管学部：医学部



Glasgow Royal Infirmary



The Wolfson Medical School



University of Glasgow

国際交流の特色

グラスゴー大学（University of Glasgow）は、イギリス（スコットランド）グラスゴー市に本部を置くイギリスの国立大学である。1451年に設置された500年以上の歴史を有する英語圏最古の大学の一つであり、オックスフォード大学、ケンブリッジ大学と並ぶアンシャン・ユニヴァシティーに属する大学である。中世から高位聖職者を輩出し、近世では、蒸気機関の発明や電力単位のワット（W）で知られるジェームズ・ワット、経済学の祖であり国富論を著したアダム・スミスなど歴史上の重要人物も多く輩出している。Glasgow Coma Scaleの名で世界に知られている医学部Wolfson Medical Schoolは、医学、歯学、獣医学の分野で英国最高峰に位置している。香川大学医学部とは交流は2011年より開始し、令和7年1月に部局間交流協定を締結した。

交流実績（令和7年度）

受入・派遣	R7
学生の受入	2
学生の派遣	1
研究者・職員の受入	0
研究者・職員の派遣	0
オンライン交流参加者（本学）	0
オンライン交流参加者（相手機関）	0



2017年 Perera先生ご夫妻とPaul先生

2016年派遣 学生とPerera先生夫妻

学生からの声

2025年 グラスゴー大学医学部への派遣学生より

2025年4月より、スコットランドにあるグラスゴー大学医学部にて4週間、臨床実習に参加しました。今回は西側に位置するQueen Elizabeth University Hospitalを中心に、老年内科、肝臓内科、脳卒中内科、またGP（家庭医）など、さまざまな診療科をフレキシブルに回らせていただきました。

老年内科：実習では転倒外来（falls clinic）や失神外来（syncope clinic）など、多様な病態に対応する外来見学と、現地の医学生と共に病棟業務にも参加しました。現地の医学生と病棟患者の身体診察に加え、採血やルート確保を頼まれたらその都度取りに行くという形で、かなり主体的に動かしてもらうことができました。先生からは診察についてのフィードバックや、内科的な管理についても教えていただき、学びを深めることができました。

GP（家庭医）：GPには検査機器はほぼなく、アクセスが限られている中でも、丁寧な問診と診察、そして何より患者の話に耳を傾ける姿勢から、医療の原点を感じました。何十年にもわたり同じ患者と向き合い続けることができるのはGPの特権だと先生はおっしゃっており、「病気ではなく人を見る」という姿勢を大切にされていたのが印象的でした。

最後になりますが、多くの方々に支えられて、かけがえのない経験をさせていただき、大変貴重な4週間を過ごすことができました。

医学科6年（派遣時） 森下陽香

教員からの声

グラスゴー大学は500年以上の歴史を有する英語圏でも最古の大学の一つであり、例えば日本人では高峰譲吉や竹鶴政孝など、歴史的な人物を多数輩出してきました。キャンパスはそうした歴史を感じさせる重厚な雰囲気には満ちています。香川大学医学部との交流は、2009年に教員によるThe Wolfson Medical School訪問から始まり、それ以来、多くの医学部学生を受け入れていただいています。また、グラスゴー大学医学部にはプルネイ・ダルサラーム大学出身の学生も在籍しています。友人と再会し、ともに勉学に励むことができるかもしれません。最近、複数あった附属病院を一つにまとめ、新たに1667床のクイーンエリザベス大学病院が設立され、さらに充実した環境で学ぶことができます。数年前から英語要件が大変厳しくなりましたが、それでも難関を乗り越えて留学を果たした学生がいます。コロナ禍によって一時派遣を中断せざるを得ませんでしたが、漸く令和6年度に双方向の学生交流推進を柱とする交流協定締結が実現し、令和7年には2名を受け入れ、1名を派遣しました。今後の大幅な交流拡大が期待できます。医学科生諸君には、ぜひ伝統あるグラスゴー大学医学部派遣に挑戦して欲しいと考えています。

医学部国際交流委員会委員・教授 和田健司
准教授 吉田裕美

グラスゴー大学医学部 協定校との国際交流事業の概要

吉田 裕美、門田 球一、横平 政直、和田 健司

はじめに

グラスゴー大学 (University of Glasgow) は、イギリス (スコットランド) グラスゴー市に本部を置くイギリスの国立大学です。1451 年に設置された 500 年以上の歴史を有する英語圏最古の大学の一つであり、オックスフォード大学、ケンブリッジ大学と並ぶアンシャン・ユニヴァーシティーに属する大学です。中世から高位聖職者を輩出し、近世では、蒸気機関の発明や電力単位のワット (W) で知られる

ジェームズ・ワット、経済学の祖であり国富論を著したアダム・スミスなど歴史上の重要人物も多く輩出しています。また近代に入ると、世界各国からエリート層が留学し

て来るようになり、母国で政治家や科学者となって国家に貢献した卒業生も多いです。大学は英国のアイビー・リーグとも言われているラッセル・グループの一員で、また国際的に重要な大学から組織されているユニベルジタツ 21 の創立メンバーの一員でもあります。医学部は Glasgow Coma Scale の名で世界に知られています。医学、歯学、獣医学の分野で英国最高峰に位置しています。

University of Glasgow, The School of Medicine の臨床実習では、学生は NHS GGC に属する大学関連病院で各科の実習を行っています。2009 年と 2011 年に徳田委員長 (当時) がグラスゴー大学医学部を訪問し、Wolfson Medical School の医学教育担当の Phillip Evans 先生、臨床面では Glasgow Royal Infirmary 産婦人科の Mahesh Perera 先生などと交流の議論を行いました。2013 年以降は Mahesh Perera 先生がコーディネーター役を果たしてくれています。2017 年 9 月に、和田委員長と徳田副学長 (当時) がグラスゴー大学医学部および附属病院を訪問し、学科長である Ruth Stewart 氏、国際交流担当の John Paul Leach 先生およびコーディネーターの Mahesh Perera 先生と、学術交流協定および実施細則の締結、次年度以降の香川大学からの派遣学生数・時期・IELTS 要求スコア、研究者交流の拡大、さらにイギリスからの学生受入に関して議論を行い、一定の合意を得ました。



令和 7 年度のグラスゴー大学医学部との交流実績

以前は毎年 4 名程度の学生派遣が実施されていましたが、平成 27 年度以降、英語条件が厳格化され、派遣学生数が少なくなっております。令和 2 年度は 1 名の派遣学生受入を受諾いただきましたが、コロナ禍のために派遣を断念せざるを得ませんでした。令和 5 年度から受入が再開されましたが、漸く令和 7 年度に 1 名の学生が派遣されました。また、先方から双方向の学生派遣の強い要請があり、令和 7 年 1 月 14 日に部局間交流協定の締結に至りました。その結果、令和 7 年度には、グラスゴー大学医学部から 2 名の学生を受け入れました。令和 8 年度も 2 名の学生の受入を予定しており、今後の交流の大幅な拡大が期待されます。

今後の交流の課題

英語の条件が厳格化されてから、派遣条件のハードルが高くなり、派遣学生が少なくなってきました。一方で、グラスゴー大学医学部からの受入れ学生は令和 7 年度に引き続き希望がありましたので、今後は学生間の交流を深めていき、継続的な派遣もできるようになることを期待しています。



ブータン王立医科大学

Khesar Gyalpo University of Medical Sciences of Bhutan

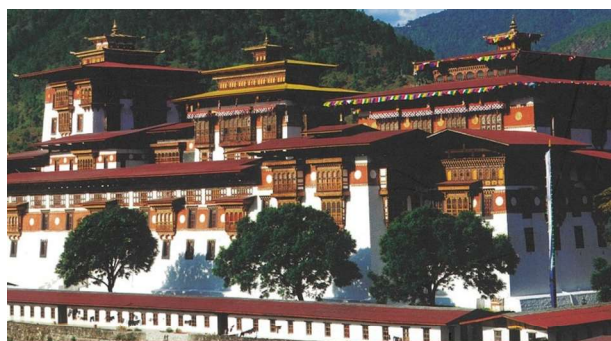
ブータン



●学部学生 約720人 ●大学院生 約120人 ●教職員 290人

ホームページ <https://www.kgumsb.edu.bt/>

交流協定締結年月日：2025年2月4日 主管学部：医学部



<<Khesar Gyalpo
University of Medical
Sciences of Bhutan>>より
抜粋

国際交流の特色

ブータン王立医科大学（KGUMSB: Khesar Gyalpo University of Medical Sciences of Bhutan）は、ブータン唯一の国立医科大学として2013年に設立された。同大学は、医学、看護学、公衆衛生学、伝統医学等の教育・研究を担う中核機関であり、近年は医学学士（MBBS）課程を開設するなど、医学教育体制の充実を進めている。香川大学との交流は、モバイル型分鏡監視装置（iCTG）のブータン導入を契機として発展してきた。その後、JICA「ブータン医学教育の質の強化プロジェクト」や「遠隔医療の体制構築を通じた母子保健強化プロジェクト」を通じて連携が深化し、教職員の相互訪問や研修、共同事業を継続的に実施している。また、JICA長期研修制度を活用し、KGUMSBの教員が香川大学大学院医学系研究科博士後期課程に在籍して研究に取り組んでいる。さらに、2025年にはKGUMSB主催の国際会議「9th International Conference for Medical and Health Sciences (ICMH)」に合わせて、香川大学、チェンマイ大学及びKGUMSBの共催による遠隔医療シンポジウムを開催し、三大学間の連携強化を図った。現在も遠隔医療、看護学、医学教育等の分野で交流が進展しており、今後の教育・研究ネットワークのさらなる発展が期待されている。

交流実績（令和7年度）

受入・派遣	R7
学生の受入	0
学生の派遣	0
研究者・職員の受入	1
研究者・職員の派遣	3
オンライン交流参加者（本学）	0
オンライン交流参加者（相手機関）	0



9th International Conference for Medical and Health Sciences (ICMH) 集合写真

教員からの声

ブータンはヒマラヤ山脈東部に位置する人口約80万人の王国であり、「国民総幸福（Gross National Happiness: GNH）」の理念で広く知られています。国土の大部分が険しい山岳地帯であるため、全国に均質な医療サービスを提供するには遠隔医療の活用が不可欠です。こうした課題に対し、香川大学は遠隔医療や母子保健分野で協力を進めており、JICA技術協力プロジェクトの実施に加え、KGUMSB、チェンマイ大学及び香川大学の三大学による遠隔医療シンポジウムの開催など、教育・研究交流を発展させています。これらの取組はブータンの医療体制強化に貢献するとともに、香川県における地域医療課題の解決にも資するものであり、今後さらなる交流の発展が期待されます。

医学部国際交流委員会委員・副学長・教授 和田健司

ブータン王立医科大学 協定校との国際交流事業の概要

和田 健司

はじめに

ブータン王立医科大学（KGUMSB: Khesar Gyalpo University of Medical Sciences of Bhutan）は 2013 年に設立され、2015 年 2 月 28 日に現在の英語名称へ改称されました。同大学は、「医学教育、研究、質の高い医療における卓越したセンターとなること」をビジョンに掲げ、多様な教育プログラムを提供しています。看護・公衆衛生学部（Faculty of Nursing and Public Health, FNPH）には、4 年制学士課程として看護学、助産学、臨床カウンセリングなどが設置されているほか、3 年制ディプロマ課程として一般看護・助産学（GNM）、地域保健、医療技術なども提供されています。また、伝統医学部（Faculty of Traditional Medicine, FoTM）には、大学院、学士及びディプロマ課程が設置されています。近年では、香川大学医学部への視察を契機に医学教育課程が新設され、「医学・外科学士（Bachelor of Medicine and Bachelor of Surgery）」プログラムが開設されました。

ブータン王国と香川大学との関係は、JICA や UNDP の支援のもと進められたモバイル型分娩監視装置「iCTG」の導入にまで遡ります。2020 年には、ブータン王妃の出産時に香川大学発ベンチャー企業が開発した iCTG が使用されたことを契機に、「国内のすべての妊婦が利用できるように」との国王の意向のもと導入が進められ、香川大学教員も現地で支援活動を展開してきました。これらの活動を通じて、研修講師を務めるほか、JICA「ブータン医学教育の質の強化プロジェクト」の一環として KGUMSB 教員が香川大学を訪問するなど、交流は着実に深化しています。特筆すべき事項として、KGUMSB の看護教員 1 名が JICA 長期研修員として来日し、2024 年度から香川大学大学院医学系研究科看護学専攻博士後期課程の正規学生として、母性看護学に関する先端的教育・研究に取り組んでいます。こうした交流の成果を踏まえた協議の結果、2025 年 2 月 4 日に大学間交流協定が締結されました。

令和 7 年度における KGUMSB との交流実績

令和 5 年度から令和 8 年度にかけて実施中の JICA 技術協力プロジェクト「遠隔医療の体制構築を通じた母子保健強化プロジェクト」には多くの本学教員が参画しており、順調に成果を上げています。令和 7 年 8 月には、KGUMSB 主催の国際シンポジウム「9th International Conference for Medical and Health Sciences (ICMH)」に合わせて、香川大学、チェンマイ大学、KGUMSB の共催により、遠隔医療をテーマとしたシンポジウム「Embracing Telemedicine/Telehealth and Digital Transformation for Advancing Quality Healthcare and Effective Health Communication」を開催し、三大学から多数の参加者を得て盛会となりました。また、ブータン政府関係者とオンライン教育システムの継続活用等に関する協議を行いました。加えて、香川大学が主導する遠隔医療に関する JICA 課題別研修には、ブータンから 2 名の研修員が参加しました。さらに、前述のとおり KGUMSB の看護教員 1 名が香川大学大学院で研究・学修を継続しており、教育・研究両面の交流が着実に深化しています。

今後の交流に向けた課題

教員レベルでの交流は着実に発展しており、ブータン政府との連携も拡大しています。今後は、個別プロジェクトの有無に左右されない持続的な交流体制を構築するとともに、学生交流の実現を目指していくことが期待されます。



タマサート大学・チュラボーン国際医学部

タイ王国



Chulabhorn International College of Medicine, Thammasat University

●学部学生 約430人 ●大学院生 約74人 ●教職員 165人

ホームページ <https://www.cicm.tu.ac.th/>

交流協定締結年月日：2025年6月26日 主管学部：医学部



国際交流の特色

タマサート大学はタイの中では有名な大きな国立大学であるが、教育を完全に英語で行うインターナショナル・クラスの医学部が通常の医学部とは別に設置されており、国策としてグローバルに活躍できる医師の人材育成を行っている。キャンパス敷地内に学生が短期滞在できる寮も設備されており、リーズナブルな価格で安全に滞在することが可能である。

2023年より、タマサート大学の医学部生3名が2年連続で香川大学医学部薬理学において約3週間の研究留学を行った。また、2024年には、医学部長を始めとする7名の教員が香川大学医学部に表敬訪問した。一方、同じく2024年に香川大学医学部長がタマサート大学に表敬訪問した。

交流実績（令和7年度）

受入・派遣	R7
学生の受入	2
学生の派遣	0
研究者・職員の受入	0
研究者・職員の派遣	0
オンライン交流参加者（本学）	0
オンライン交流参加者（相手機関）	0



教員からの声

本交流プログラムを通じて受け入れた学生は、いずれも高い学習意欲と責任感を有しており、研究活動に対して非常に真摯に取り組んでいた。特に、動物実験を含む薬理学研究においては、指導内容を的確に理解し、自発的に課題に取り組む姿勢が見られ、短期間ながら着実な成長が認められた。

また、附属病院の見学や本学学生との交流を通じて、日本の医療体制や文化に対する理解を深めており、受入側にとっても国際交流の意義を再認識する有意義な機会となった。今後も本交流を継続・発展させることで、双方の教育・研究の質の向上に寄与することが期待される。

医学部長 西山 成

タマサート大学・チュラボーン国際医学部 協定校との国際交流事業の概要

西山 成

はじめに

タマサート大学はタイの中では有名な大きな国立大学であるが、教育を完全に英語で行うインターナショナル・クラスの医学部が通常の医学部とは別に設置されており、国策としてグローバルに活躍できる医師の人材育成を行っている。キャンパス敷地内に学生が短期滞在できる寮も設備されており、リーズナブルな価格で安全に滞在することが可能である。

令和7年度のタマサート大学・チュラボーン国際医学部との交流実績

本年度は、タマサート大学チュラボーン国際医学部より医学部学生2名を香川大学医学部薬理学教室に受け入れた。両学生は非常に真摯な態度で研究に取り組み、教員の指導のもと、動物実験を含む薬理学研究に積極的に参加し、基礎から応用に至るまで幅広い知識と技術の習得に努めた。

また、大学附属病院の各種施設見学を通じて、日本の医療体制や臨床現場への理解を深める機会も提供した。さらに、研究活動時間外においては本学医学部生との交流も活発に行われ、日常的なコミュニケーションや文化的交流を通じて、日本文化への理解を深めるとともに、国際的視野の向上にも寄与した。

今後の交流の課題

本交流事業は、学生の研究能力の向上および国際的視野の涵養において有意義な成果を上げている。一方で、今後さらなる発展を図るためには、継続的かつ双方向的な学生交流の実現が重要である。本年度は本学からの学生派遣が実施されなかったことから、今後は参加学生の確保を進め、相互交流の均衡を図る必要がある。

医学部との国際交流準協定校の紹介

イギリス



ロンドン大学・セントジョージ医学校



City St George's, University of London
(formerly St George's, University of London)

●学部学生 約3,000人、●大学院生 約1,100人、●教職員 約1,400人
ホームページ <https://www.citystgeorges.ac.uk/> 交流開始年：2009年4月 主管学部：医学部



ロンドン大学のあるTootingの駅

St. George's 医学校

学生たちの泊まるDormitory

交流実績（令和7年度）

受入・派遣	R7
学生の受入	0
学生の派遣	0
研究者・職員の受入	0
研究者・職員の派遣	0
オンライン交流参加者（本学）	0
オンライン交流参加者（相手機関）	0

教員からの声

ロンドン大学セントジョージ医学校は、その前身を含めると250年以上の歴史を有する世界有数の医学教育機関です。2024年にはCity, University of Londonとの統合により、City St George's, University of Londonの一部として新たな体制へ移行しましたが、セントジョージ病院を基盤とする医学教育・研究の伝統は現在も受け継がれています。

こうした伝統ある大学と香川大学との交流は、2007年に開始されたブルネイ・ダルサラーム大学医学部での夏季医学セミナーに遡ります。同セミナーにおいて香川大学学生への講義を担当された教員との交流を契機として、2009年に医学科6年次生の臨床実習派遣が実現しました。同年9月には香川大学医学部教員がセントジョージ医学校を訪問して協議を行い、その後も継続的に学生交流が実施されてきました。

2017年には本学関係者がセントジョージ医学校を訪問し、交流責任者との間で今後の連携について意見交換を行いました。その後、担当教員の退職や先方の国際交流方針の変更により、従来と同様の形での学生派遣は難しい状況となりましたが、令和5年度には臨床実習学生1名の受入れが再開されました。

今後は、先方大学の組織改編及び国際交流制度の変更を踏まえ、学生交流の条件や実施方法について改めて協議を行い、持続可能な交流体制の構築を目指したいと考えています。

医学部国際交流委員会委員・教授 和田健司

国際交流の特色

ロンドン大学は1836年に設立された英国を代表する連合制大学であり、ロンドン中心部のラッセル・スクエア周辺に本部を置いている。現在は複数の加盟大学及び研究機関から構成され、世界有数の高等教育ネットワークを形成している。セントジョージ医学校は1900年にロンドン大学の一員となり、長年にわたり英国有数の医学教育機関として発展してきた。2024年にはCity, University of Londonとの統合により、City St George's, University of Londonの一部となったが、セントジョージ病院に隣接する教育・研究拠点は引き続き維持されている。同校は医学、生物医科学、看護学及び保健医療科学分野において質の高い教育・研究を実施しており、英国のみならず欧州及び世界各国から多くの学生を受け入れている国際色豊かな医学教育機関である。香川大学医学部との交流は2009年に開始され、学生交流を中心として継続的な連携が行われている。

学生からの声

この度、ロンドン大学セントジョージ校（St George's, University of London：以下 SGUL）の腎臓内科にて臨床実習をする機会を頂きました。将来、国際的に活躍できる医師を目指していく上で、在学中に何らかの形で海外留学が出来ればと漠然と考えておりました。そんな時、5年次の夏季に大学の先輩が留学報告会で発表されている姿を目の当たりにし、そのあまりの魅力に、自分もこのプログラムに挑戦しようと思うに至りました。以来、実践的な英語学習に常に触れるよう努めてきました。

現地では、なんと言っても積極的にトライする姿勢が大事で、日本人の大人しく迷惑をかけないようにしよう、という態度だと本当に何もすることがありません。先生方が忙しそうでも話しかけて、あれをしたいこれしたいとアピールすると色々やらせてもらえます。辛く苦しいこともありますが、すごく丁寧に優しく接してくださる方もおり、様々なことが体験できて非常に良い経験になったと思います。 令和5年度派遣学生 大藪公平（報告抜粋）

ロンドン大学・セントジョージ医学校（現 City St George's, University of London） 準協定校との国際交流事業の概要

門田 球一、横平 政直、和田 健司

はじめに

ロンドン大学（University of London）は1836年に設立された連合大学であり、ロンドン中心部のラッセル・スクウェアに本部を置いています。現在は複数の加盟大学・研究機関から構成される英国有数の高等教育機関であり、世界各国から多くの留学生を受け入れています。セントジョージ医学校（St George's, University of London）は1900年にロンドン大学に加盟した伝統ある医学校であり、2024年にはCity, University of Londonとの統合により、City St George's, University of Londonの一部となりました。現在もセントジョージ病院を基盤として、医学、生物医学及び保健医療分野において高い評価を受けています。



ロンドン大学セントジョージ医学校との交流は2009年に始まりました。その契機は、2007年に実施したブルネイ・ダルサラーム大学医学部の夏季医学セミナーへの学生派遣でした。当時講義を担当された教員との縁を通じて、6年次の臨床実習への学生受入れを依頼し、2009年に初めての派遣が実現しました。

その後も交流は継続され、2012年には2名の学生を派遣し、5週間にわたり希望診療科での臨床実習と国際交流活動に参加しました。2015年以降はIELTS要件の引上げにより派遣が難しい状況が続きましたが、2018年度に2名、2019年度に1名を派遣しました。2020年度にも1名の受入れが決定していましたが、COVID-19の影響により派遣は中止となりました。その後、先方の組織改編や国際交流方針の変更により継続が危ぶまれましたが、令和5年度には1名の派遣を再開することができました。

世界的に評価の高い医学教育機関との交流は、本学学生に貴重な学修機会を提供するとともに、医学部の国際化推進にも大きく寄与しています。今後は、新たな体制のもとで学生交流の実施条件等について協議を進め、継続的な交流の発展を目指していく予定です。

令和7年度のロンドン大学・セントジョージ医学校との交流実績

残念ながら令和7年度は学生の派遣には至りませんでした。コロナ禍直前から、教員主導による派遣形態から学生が自ら応募する方式へ移行しており、その後、先方大学において大規模な組織改編も実施されました。こうした状況を踏まえ、学生が安心して応募し、継続的に派遣できる体制を構築するため、派遣制度や学生支援の在り方について検討を進めています。

チェンマイ大学看護学部 International Nursing Seminar 2025 in Kagawa への受入れ

山本 美輪、谷本 公重、川田 紀美子

令和 7 年 2025 年 5 月 26 日～31 日まで、チェンマイ大学看護学部生 5 名および引率の Wanicha Pungchompoo 准教授 を看護学科へお迎えし、International Nursing Seminar 2025 in Kagawa を開催しました。チェンマイ大学は本学にとって重要な協定校の一つであり、これまで学生・教職員間で活発な相互交流を行ってきました。コロナ禍により一時的に対面交流を中断せざるを得ませんでしたが、その間もオンラインでの交流を継続し、2023 年より対面での学生交流を再開しています。

今回のプログラムでは、日本の看護・医療に関する統計動向、日本の看護制度、看護教育システム、介護保険、訪問看護などに関する講義に加え、臨床判断トレーニングや高齢者体験などの演習を実施しました。また、訪問看護ステーションから利用者宅への訪問、消防署見学、AED 講習など、実践的な学びを得られる内容も盛り込みました。さらに、本学学生による 書道パフォーマンス、栗林公園の散策、お抹茶体験 など、日本文化に触れる機会も提供しました。参加学生は、伝統文化に直接触れることで日本への理解を深めるとともに、本学学生との交流を通じて互いの文化や価値観を共有する貴重な時間となりました。実施期間中には、本学学生が留学生のアテンドを行い、ウェルカムパーティでの交流や講義への同席など、多様な場面で国際的なコミュニケーションを経験しました。本学学生にとっても、異文化理解や国際的視野を広げる大きな学びの機会となりました。

本プログラムを通じて、両大学の学生が互いに学び合い、国際的な看護専門職としての成長につながる有意義な交流が実現しました。今後も継続的な連携を図り、より充実した国際交流活動を推進してまいります。



日本文化体験・栗林公園



報告会

2025年7月25日から8月22日まで、グラスゴー大学医学部からの2名の学生を香川大学医学部に受け入れ、研修を行いました。

Ms. Arshay-Munir Sharif (脳神経外科学)

Ms. Caroline Adesuyi (周産期学婦人科学)

グラスゴー大学からの学生の受入れは前例がなかったこともあり、来日された初日は盛りだくさんのスケジュールとなりました。フライト到着の遅延から始まり、大学への到着遅れ、医学部長を30分以上待たせた開講式、事務手続きとWiFi接続のトラブル、受入れ講座への挨拶、あかつき荘への移動、買い出し…、全てのスケジュールが遅延され、スコットランドのエジンバラ空港からの長旅を続けてきた彼女達は徐々に口数が減っていきました。初来日の長い一日で2時間遅れの夕食にたどり着いた時、彼女達に笑顔と明るい会話に戻ってきました。満面の笑みが浮かべられ、回転寿司ながらも日本の寿司ネタに舌鼓をうっていました。翌日が週末であったことから、週明けから始まる研修に向けて、初日に全ての準備と説明が行われたのですが、事務の方が全てを手配してくださっていなければ、対応しきれず、二人を無事に迎え入れることはできませんでした。

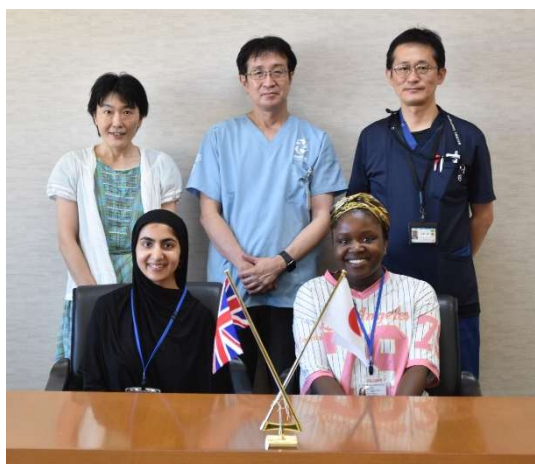
受入れの本プログラムでは、本人の希望に基づいて、脳神経外科と周産期婦人科で1名ずつ受け入れてくださり、研修が行われました。研修の最終日に、閉会式にて二人に各講座での研修と日本での滞在についてプレゼンテーションを行っていただきましたが、二人とも各講座での歓迎や対応、研修内容にはとても満足されていました。日本での診療の違いについて、特にチーム医療として多くの方々をサポートしている点に影響を受けているようでした。日本の医療の丁寧な対応やサポートにも関心をもたれたようでした。また、プライベートでの日本の文化や香川県を楽しんでいた様子が多くの写真のプレゼンテーションからうかがえました。

あかつき荘では、各自で調理をすることができないことから、食事の面でやや問題がありました。1名はハラル食を必要としていましたが、コンビニのお弁当やキャンパス内の施設の利用だけでは飽きてしまうということもあり、自発的に調べ、徒歩圏だけではなく、バスや電車も活用して足を運んでいたようです。コミュニティーバスも乗りこなされていました。

彼女達の日本での滞在は、日本医療の研修を学んだだけではなく、日本文化や地方での環境にも触れ、とても満喫されたようでした。

最後に、手続きを滞りなく準備してくださった2か国の事務職員の方々、プログラムに参加したグラスゴー大学医学部の2名の学生、二人を受け入れてくださった各講座の先生方、国際交流委員の先生方、および医学部長に深く感謝申し上げます。

【初日および開会式】



【報告会および閉講式】





【帰国@高松空港】



香川大学医学部とブルネイ・ダルサラーム大学医学部との国際交流プログラム

－ 2025 年冬季国際交流プログラム（第 14 回）－

安田 真之

2025 年冬季国際交流プログラムとして、香川大学医学部が主催し、国際交流委員会の企画において、大学間および学部間交流協定を行っているブルネイ・ダルサラーム大学（UBD）医学部との国際交流プログラムを開催しました。2025 年 12 月 8 日から 23 日の期間に UBD 医学部学生計 3 名が医学部を訪れました。解剖学実習および基礎系、臨床系各講座の訪問、香川大学医学部学生との交流、更には学外（金比羅山など）での本学部学生とのレクリエーションなどを行いました。

プログラム最終日の報告会では各 UBD 学生が講座訪問等の様々な体験について報告し、質疑応答がなされ、医学部長からプログラム修了証書が手渡されました。

このプログラムは 2007 年の冬に開始され、新型コロナウイルス感染症により 2020 年から 2022 年までは開催が叶わず、オンラインでの交流などで継続されてきました。2023 年度から現地訪問が再開され、継続開催できております。UBD 側でのプログラムに対する評価は非常に高く、継続的開催が希望されています。

日程

Date	12/7 (Sun)	12/8 (Mon)	12/9 (Tue)	12/10 (Wed)	12/11 (Thu)	12/12 (Fri)	12/13 (Sat)
AM		11:00~ Opening Ceremony & Orientation	Lecture Inflammation Pathology	Lecture Public Health	Observing the procedure Gastroenterology And Neurology	Lectures and practical training Otorhinolaryngology	A Tour of Shodoshima
PM	UBD Students Arrive at Kagawa. (14:40 Takamatsu Airport)	14:30~ Courtesy visit to the Dean of the Faculty of Medicine 15:00~ Shopping	Lectures and practical training Pediatrics	Lecture Genome Medical Science and Medical Genetics	Lecture Molecular Neurobiology	Lecture Histology and Cell Biology	
		17:30~ Welcome dinner					
Date	12/14 (Sun)	12/15 (Mon)	12/16 (Tue)	12/17 (Wed)	12/18 (Thu)	12/19 (Fri)	12/20 (Sat)
AM	A tour of the Konpira Highway And Chichibugahama Beach	Rest & Laundry	Lecture Cardiovascular Physiology	Lecture General Medicine & Infectious diseases	Lecture Biochemistry	Lectures and practical training Radiology	A tour of Kobe
PM		Lecture Molecular Oncologic Pathology	Practical training Hygiene	Observing a surgery Urology	Lecture Immunology	Tour Skills Laboratory	
		Club experience (Karate)			Club experience (Kyudo)		
Date	12/21 (Sun)	12/22 (Mon)	12/23 (Tue)	12/24 (Wed)	12/25 (Thu)	12/26 (Fri)	12/27 (Sat)
AM	A tour of Kobe	Rest & Laundry	11:00~12:00 Closing Ceremony & Final Presentation	11:30 Departure from Akatsuki-sou Leave Takamatsu (PM13:25 Takamatsu Airport)	—	—	—
PM		Preparation for Final Presentation	Rest		—	—	—
			18:00~ Farewell Party				



閉講式の様子

JICA 2025 年度 課題別研修「遠隔医療による地域保健医療体制の改善—日本の遠隔
医療先進県の事例を通じて—」実施報告

和田 健司

本課題別研修は、遠隔研修（2025 年 10 月 2 日～13 日）および来日研修（11 月 26 日～12 月 10 日）の二部構成で実施され、ガーナ、モルディブ、タイ、フィリピン、トンガ、ブータン、エジプト、フィジーから計 10 名の研修員が参加しました。

香川県では、24 の有人離島や山間部における医療アクセス向上を目的として、2003 年以降、官民学連携による遠隔医療を推進してきました。本研修は、K-MIX や iCTG など香川の先進的な取組を共有し、参加国における遠隔医療の発展と保健医療システムの強化に貢献することを目的として実施されました。

遠隔研修では、Zoom によるオリエンテーションや Inception Report 発表会に加え、Google Classroom を活用して、日本の医療制度、ICT 活用、iCTG、遠隔医療、緩和ケア等に関するオンデマンド講義を提供しました。

来日研修では、東京・横浜・香川において講義および視察を実施しました。東京慈恵会医科大学附属病院、横浜市立大学附属病院、香川大学医学部・附属病院、小豆島中央病院等を訪問し、日本の遠隔医療や ICT 活用の実践事例を学びました。特に iCTG や K-MIX R の運用に関する講義・実機見学は高い評価を得ました。研修員は研修期間中に Daily Report を作成し、最終日には各国での遠隔医療導入に向けた Action Plan を発表しました。発表内容はいずれも具体性に富み、講師や研修員同士の活発な意見交換が行われました。

参加者からは、日本の制度や技術、香川県の実践事例を直接学べたことが有益であったとの評価が多く寄せられました。また、過年度研修を契機として新たな遠隔医療国際協力プロジェクトが開始されるなど、着実な成果も生まれています。最後に、本研修の実施にご協力いただいた関係者の皆様に深く感謝申し上げます。



2025 年度 JST さくらサイエンスプログラム「インドにおける臨床工学技士育成と持続可能な医療体制 推進に向けた連携強化プログラム」実施報告

和田 健司

本プログラムは、2026 年 2 月 8 日から 15 日まで実施され、全インド医科大学（AIIMS）5 校から若手幹部医師・病院管理者 6 名が参加しました。

インドでは高度医療機器の導入が進む一方、臨床工学技士制度が未整備であり、医療機器の管理や運用を担う専門人材の育成が課題となっています。本プログラムは、日本の臨床工学技士制度や教育体制、多職種連携の実践を学び、インドにおける制度整備や人材育成の推進に資することを目的として実施されました。

研修では、香川大学医学部および附属病院を中心に、日本の医療制度や臨床工学技士制度に関する講義を実施するとともに、透析部門、検査部、放射線部、手術室、救急外来などの視察を行いました。また、臨床工学技士養成大学の見学、医療系スタートアップとの意見交換、災害医療や DMAT に関する講義・演習を通じて、日本の医療を支える多様な仕組みについて理解を深めました。

さらに、小豆島中央病院を訪問し、離島医療や遠隔医療の実践事例を学ぶとともに、地域医療における臨床工学技士の役割について意見交換を行いました。

最終日にはアクションプラン発表会を開催し、参加者はインドにおける臨床工学技士制度の導入や人材育成に向けた具体的な提案を発表しました。参加者からは、日本の臨床工学技士の専門性や多職種連携を実地に学べたことが有益であったとの評価が寄せられました。

本プログラムを契機として、今後の人材育成や共同研究に関する継続的な連携が期待されます。最後に、本プログラムの実施にご協力いただいた関係者の皆様に深く感謝申し上げます。



チェンマイ大学医学部 Medical Seminar 2025 in Kagawa への受入れ

鈴木 裕美、宇山 徹、門田 球一

チェンマイ大学医学部 4 年生 1 名を 2026 年 3 月 2 日～27 日に香川大学医学部に受け入れて研修を行いました。

Mr. Kanlapapruerk Khampa (耳鼻咽喉科学)

本プログラムでは、日本の先端的な医療の現場での実地研修はもちろんのこと、事前に聞き取り調査した個々の学生の関心事項に沿った実習を併せて実施しています。到着翌日に開講式と歓迎会を開催し、その翌日から実習を開始しました。週末にはホームステイを行い、自由時間を利用して医学生数名と金刀比羅宮や栗林公園、父母ヶ浜など香川ならではの観光地への訪問など楽しんでいました。

研修最終日の午後には、西山医学部長臨席のもと閉講式を行い、留学生による最終プレゼンテーションが行われました。香川大学の最先端医療に触れて充実した実習が行われ多くを学び、先輩医師との交流も楽しんだ様子やプライベートでも留学生生活を満喫できた様子がうかがえました。

最後に、参加したチェンマイ大学医学部生、およびそれを支えていただいた講座の先生方、国際交流委員、事務職員、および香川大学医学部学生諸君の尽力に深く感謝申し上げます。



令和7年度国際交流委員会委員名簿

講 座 等	職 名	氏 名	備 考
周産期科学婦人科学	教 授	金西 賢治	委員長 (R5. 10. 1～R7. 9. 30)
分子腫瘍病理学	教 授	門田 球一	委員長 (R7. 10. 1～R8. 3. 31)
医用化学	教 授	和田 健司	
医学教育学	〃	横平 政直	
消化器内科	〃	小原 英幹	
歯科口腔外科学	〃	三宅 実	
小児科学	〃	日下 隆	
形成外科学	〃	永竿 智久	
眼科学	〃	鈴間 潔	
総合診療学	〃	市来 智子	
老年看護学	〃	山本 美輪	
小児看護学	〃	谷本 公重	
母性看護学	〃	川田紀美子	
総合生命科学	准教授	中北 慎一	
生化学	〃	宇山 徹	(～R8. 2. 28)
総合生命科学	〃	吉田 裕美	(R7. 5. 1～)
消化器内科	〃	森下 朝洋	
卒後臨床研修センター	〃	安田 真之	
周産期科女性診療科	〃	花岡 有為子	
心理実践指導学	〃	坂中 尚哉	
心理実践教育学	〃	谷渕 真也	
衛生学	助教	鈴木 裕美	
ゲノム医科学・遺伝医学	〃	小川 崇	(～R8. 2. 28)
医療技術部	臨床工学技師長	光家 努	(R7. 12. 1～)
事務部	総務課長	寒川 貴司	

令和7年度国際交流コーディネーター

担 当 大 学	講 座 等	職 名	氏 名
中国医科大学 河北医科大学	歯科口腔外科学	教 授	三宅 実
	形成外科学	教 授	永竿 智久
	眼科学	教 授	鈴間 潔
	母性看護学	教 授	川田紀美子
	小児看護学	教 授	谷本 公重
	老年看護学	教 授	山本 美輪
	心理実践教育学	准教授	谷淵 真也
	医用化学	教 授	和田 健司
ブルネイ・ダルサラーム大学 ブルネイ・ダルサラーム国保健省	小児科学	教 授	日下 隆
	卒後臨床研修センター	准教授	安田 真之
	消化器内科	教 授	小原 英幹
	医用化学	教 授	和田 健司
	総合生命科学	准教授	中北 慎一
	総合診療学	助 教	市木 智子
	ゲノム医科学・遺伝医学	助 教	小川 崇
	周産期科女性診療科	准教授	花岡有為子
チェンマイ大学	衛生学	助 教	鈴木 裕美
	総合生命科学	准教授	中北 慎一
	小児看護学	教 授	谷本 公重
	老年看護学	教 授	山本 美輪
	母性看護学	教 授	川田紀美子
	医用化学	教 授	和田 健司
	医学教育学	教 授	横平 政直
	生化学	准教授	宇山 徹
カンボジア健康科学大学	医用化学	教 授	和田 健司
	心理実践指導学	准教授	坂中 尚哉
ヤンゴン第一医科大学	小児科学	教 授	日下 隆
	卒後臨床研修センター	准教授	安田 真之
	医用化学	教 授	和田 健司
プトラ・マレーシア大学	医用化学	教 授	和田 健司
カリフォルニア大学マーセド校	医用化学	教 授	和田 健司
カルガリー大学医学部	医用化学	教 授	和田 健司
ニューカッスル大学医学部 ロンドン大学セントジョージ医学校 グラスゴー大学医学部 国立シンガポール大学	分子腫瘍病理学	教 授	門田 球一
	医学教育学	教 授	横平 政直
	医用化学	教 授	和田 健司
	総合生命科学	准教授	吉田 裕美



令和 7 年度香川大学医学部国際交流活動報告書



香川大学医学部 国際交流委員会

〒761-0793 香川県木田郡三木町大字池戸 1 7 5 0 - 1

TEL (087)891-2008

FAX (087)891-2016

E-mail kouhou-m@kagawa-u.ac.jp

URL <https://www.kagawa-u.ac.jp>